

令和2年度

神奈川県社会教育委員連絡協議会
地区研究会【山北町会場】



少子高齢化時代における社会教育のあり方を考える
～共和地区の取り組みをとおしての考察～

主催 神奈川県社会教育委員連絡協議会

主管 山北町社会教育委員会議

目 次

会長あいさつ	1
1 はじめに	2
2 山北町の社会教育の現状	3
3 人権講話「山北町の人権・同和教育」	4
4 共和地区について	8
5 共和地区住民へのアンケート調査の実施	11
6 アンケート調査から読み取れる住民の意識とは	12
7 これからの時代の社会教育のあり方とは	16
8 山北町の魅力の発信	20
9 共和地区の行事に参加して	22
10 参考資料	
(1) アンケート結果	28
(2) アンケート自由記述	30
(3) 移住者用アンケート結果	34
(4) 移住に関わった方用アンケート結果	35
(5) 社会教育委員だよりNo.21～25	37

地区研究会（山北町会場）の開催にあたって

山北町での地区研究会が、「書面開催」という形で実施されることに際して、ご挨拶申し上げます。

社会教育委員のかたがたを始め、ご関係の皆様の、おそらく数年にわたるさまざまなご努力があつて地区研究会の開催の準備がなされてきたのだと思います。しかしそれが、周知のと通りの新型コロナウイルス感染蔓延の影響で、「対面」での集会を催すことが困難になり、「書面開催」という形での実施になり、さらにご負担が増えたのではないかと思います。皆様のご尽力に対し、深く感謝いたします。

しかし、「書面開催」という言葉は、やはり不思議な言葉です。「対面」という言葉も多用され、近頃では、「人流（じんりゅう）」というさらに不思議な言葉も広がっているようです。このような状況は、専門家を除いては想定されてはいなかったのだろうと思います。決して NHK のチコちゃんに叱られてしまうかのように、ボーッと生きてきたわけでもないのですが、さまざまなことにより関心を持ちながら生活することの重要性を、身にしみて感じるこの頃です。

「対面」を基本とする社会教育が、こういう状況の中でどういう意味を持つと考えるのか、社会教育は本当に必要か不要かということまでも考えながら、「書面開催」の地区大会に臨めるといいと思います。

神奈川県社会教育委員連絡協議会

会長 鈴木 眞 理

1 はじめに

(1) 研究テーマ

少子高齢化時代における社会教育のあり方を考える ～共和地区の取り組みをとおしての考察～

平成から令和へと時代が移り変わったものの、平成時代の負の遺産とも言うべき「地方の過疎化」と「少子高齢化」、そして地域社会の衰退という現象は、何ら変わることなく次代まで引き継がれることとなった。

山北町は以前から人口減少が続くうえに、平成 26 年には日本創生会議による消滅可能性都市と指定されたこともあり、危機感をもって定住や移住対策に取り組むとともに、子育てをする家庭や高齢者世帯への支援等の対策を講じてはいるものの、人口の減少に歯止めがかかっている状況とは言い難い。

このような山北町の現状から、『山北町第 5 次総合計画（後期基本計画）』では、「協働のまちづくりの推進」や「次代を担う子どもの教育・青少年の育成」等を重点課題として採り上げており、また、社会教育関係では「地域に根ざした生涯学習の活性化」が、推進プランの一つとして明記されている。これらの課題等への取り組みには、行政と地域住民・地域社会との協働が不可欠であり、ある意味では一人ひとりの住民の民意度が試されるものともなってくる。

社会教育委員会では平成 29・30 年度の 2 年間、上記のような地域社会の現状を踏まえながら、主に子どもたちと地域との関わりに焦点を当てた【地域諸団体の活動に、家庭・地域の教育力の再生の方向性を探る】をテーマとして研究に取り組んできた。研究の結果、主催者側の高齢化の課題、子どもたちを含む参加者の減少、地方における都市化現象等々の問題点があることがわかった。

平成という時代を経過する中で、都市や地方を問わず世の中は大きく様変わりをしてきた。少子化、高齢化、経済格差、子どもへの虐待や社会的弱者の増加等々の負の連鎖に陥ってしまっている。これらの大きな課題を抱え込み、地方の行政はもとより地域社会の様々な組織が苦悩していると言っても過言ではない。

こういった地域の状況の中で、私たち社会教育委員が「何をすれば良いのか」は難しい課題ではあるが、**地域の活性化や共同体意識の再構築**、そして何よりも**未来へとつなぐ子どもたちの育成**に少しでも役立つような活動を進めていきたいと考えている。

令和元年度に山北町教育委員会から【少子高齢化時代における社会教育のあり方】についての諮問を受け、令和元・2 年度の 2 年間にわたって研究を重ねた結果を報告するものである。

(2) 具体的な取り組み

山北町の連合自治会及び共和地区住民福祉協議会の中で、地域の様々な自主的活動をとおして、地域の活性化や住民相互の連携、更には独自の住民サービス等に取り組んでいる共和地区の活動に焦点を当て、その成果や課題等を掘り下げて考察する。

2 山北町の社会教育の現状

山北町では、『山北町生涯学習推進プラン【改訂版】』（平成30年3月）において「子どもから高齢者まで、生涯にわたり学び、生きがいのある充実した人生を送ることができる生涯学習社会の実現」を基本目標に定め、生涯学習、生涯スポーツ、文化活動、更には青少年の育成や人権尊重を重視した生涯学習の充実を図るなど多様な活動に取り組んでいる。

山北町は自然豊かな西丹沢の山々に囲まれ、そこを流れる酒匂川の上流にはユーシンブルーを代表とする渓谷美や、三保ダムによって生まれた丹沢湖もあり、四季を通して風光明媚な地域となっている。また、その自然環境を活かして「カヌーマラソン IN 丹沢湖」をはじめとする独自のスポーツ行事も盛んである。

また、平安時代末期につくられた山城である「河村城跡」や、明治22年に開通した東海道本線（現在の JR 御殿場線）に関する「鉄道遺産」、南北朝時代の発祥とされている「お峯入り」の行事など、歴史的、文化的な遺産も豊富であり、学ぶための素材や活動のきっかけとなる事象は、かなり多いといえることができる。

＜山北町の主な生涯学習・生涯スポーツ・社会教育年間事業＞

月	事業
4	青少年指導員だより発行
5	文化財講座、青少年健全育成連絡協議会、親睦ゴルフ大会、パークゴルフ大会
6	生涯学習推進協議会、青少年健全育成大会、カヌー教室、球技大会
7	人権啓発チラシ発行、青少年健全育成パトロール、足柄上郡総合体育大会、カヌーマラソンIN丹沢湖
8	
9	野外体験活動研修会、社会教育委員だより発行、パークゴルフ大会
10	やまきた健康スポーツ大会、やまぶき学級(11月まで)
11	町民文化祭、室生神社の流鏑馬、人権啓発チラシ発行、文学歴史散歩、丹沢湖ハーフマラソン大会
12	人権講演会、ライブ・イン・山北、青少年健全育成パトロール
1	成人式、社会教育委員だより発行、川本杯争奪チームレース大会、足柄上地区一周駅伝競走大会
2	世附の百万遍念仏、かながわ駅伝競走大会
3	文化財講座、人権啓発チラシ発行、社会教育委員だより発行、町内一周駅伝競走大会、スポーツ推進委員だより発行
○山北町立生涯学習センター事業 ・文化活動事業：町民文化祭、生涯学習センターフェスティバルなど ・養成講座：おはなしボランティア養成講座 ・生涯学習活動事業：一般教養、美術工芸、料理教室、図書、映画上映、サークル体験	

3 人権講話「山北町の人権・同和教育」

山北町教育委員会生涯学習課
社会教育指導員 水野 博文

(1)はじめに

山北町は、長い間、人権問題に取り組んできた「人権の町」です。町には、同和地区があり、人々がそこで悲しい歴史を背負ってきた事実があります。「差別」は、黙っていれば、自然に解消するから、あえてふれない方が良いという考え方は、悲しくつらい立場の人を黙って放っておくに等しいことです。

呼び起こすということではありません。そういう歴史的な事実を知り、その上で「差別」について考えること、一人ひとりの「人権」について深く考えることが重要です。

(2)同和問題と国の対策

①同和問題とは（同和対策審議会答申より 1965 年）

同和問題とは、日本社会の歴史的発展の過程において形成された身分階層構造に基づく差別により、日本国民の一部の集団が経済的・社会的・文化的に低位の状態におかれ、現代社会においても、なおいちじるしく基本的人権を侵害され、とくに、近代社会の原理として何人にも保障されている市民的権利と自由を完全に保障されていないという、もっとも深刻にして重大な社会問題である。

②同和対策審議会答申（1965 年）に至る道程

1951 年、雑誌「オールロマンズ」に「特殊部落」という題名の小説が載せられた。

- ・京都市にある被差別部落の実名を挙げ、そこを舞台にして劣悪な環境を誇張し犯罪者のように書かれた。部落の人たちは差別意識を広げる小説が雑誌に発表されたことに、当然燃え上がるような怒りを爆発させた。
- ・作者は、京都市の職員。それも環境衛生担当であった。京都市長は次のように語った。
「職員の中にこういう差別行為をする人間がいるのはけしからん。私はよい環境で育ってきたから差別感を持っていない。だから気持ちが分からない」
- ・どれだけ屈辱を受けたかを考えず美しい京都が汚されることだけを怖れて小説を批判したこと、職員だけが悪いと考えたことがまた問題となった。

■立ち上がった人々

- ・専用水道がない所 ・便所がなく共同で使っている所 ・消防車が通れない所
- ・下水道が通っていない区域 ・失業者が多く生活保護世帯が多い所
- ・トラコーマなどの疾病がはやりところ

地図に赤丸をつけさせていくと、すべてが重なっていく。「この地域はどのように言われているところですか」

劣悪な生活実態こそが差別の実態であり、差別感情を生み出す差別の根源であることを明らかにした。この闘いをきっかけにして行政のあり方が考え直された。



1961 年 12 月 7 日内閣総理大臣は本審議会に対して「同和地区に関する社会的および経済的諸問題を解決するための基本的方策」について諮問した。



同和問題（部落差別問題）が日本国憲法の理念である基本的人権に関わる問題であり、その早急な解決が国の責務であり同時に国民的課題であるとの認識に立って、環境改善、社会福祉、産業・福祉・教育問題、人権問題など同和対策の具体策を示し、また同和対策の方向として特別措置法の制定、推進機構の設置、国の財政的補助、総合計画の策定などをあげた。



③同和対策事業特別措置法（同対法 1969 年）

同和対策審議会答申を受け、国は同和問題解決のために、1969 年に公布・施行した。初めて国および地方公共団体の責務を定めた法律（10 年間の時限立法）。同和地区住民に対する不当な差別と偏見を排除し、社会的・経済的地位の向上をはばむ諸要因を解消することが目的。3 年間の延長となる。



④同対法以降の同和問題を解決するための法律

1982 年	地域改善対策特別措置法（地対法）
1987 年	地域改善対策特定事業に係る国の財政上の特別措置に関する法律（地対財特法）
1996 年	人権擁護施策推進法
1997 年	地対財特法の一部を改正する法律（5 ヶ年時限立法、地域改善事業が一般対策へ円滑に移行することが重点とされ、国策としての同和対策事業は終焉した）

（3）1986 年から 2000 年までの「山北町の同和対策の基本的な考え方」

1972（昭和 47）年から同和対策事業に取り組み、生活環境改善をはじめ、個人施策の活用による住宅建設や雇用の促進を図るなど一定の成果をあげてきている。また、庁内には、同和対策事務推進会議を設置するとともに、広く町民の代表の方々と山北町同和対策啓発推進協議会を組織し、住民への啓発活動を推進している。

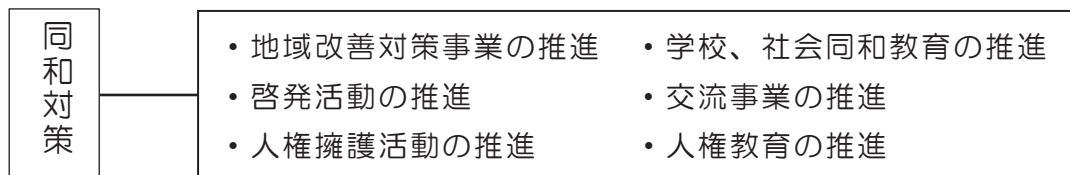
こうした取り組みの中で、同和問題についての理解と認識は深まりつつあるが、心理的差別は今も残っている。

このため、地域改善対策事業の推進と学校・社会同和教育との連携に留意しながら、人間尊重を基盤とした人権意識の高揚と啓発活動をなお一層充実することが、これからの重要な課題である。

■基本方針

差別のない地域社会をめざし、すべての町民が基本的人権と自由を確保できるよう関連する各種の事業を総合的、計画的に推進する。

■施策対系



①同対法に基づいた主な同和対策事業

- ・昭和 47 年 道路改良
- ・昭和 48 年 集会所建設
- ・昭和 51 年 下水排水路改良
- ・昭和 52 年 小集落地区改良
- ・昭和 57 年 児童公園建設 など

②啓発研修事業

- ・昭和 51 年～平成 15 年 夏季学習会
- ・昭和 56 年 同和教育啓発ちらし作成
- ・同和教育講演会
- ・各種学級で同和教育講座（家庭教育学級）
- ・PTA 同和教育研修会（山北中学校 PTA・川村小学校 PTA）
- ・昭和 61 年～平成 12 年 リーフレット「みんながしあわせになるために」発行（4 回）
- ・平成 15 年 人権と同和問題に関する意識調査
- ・平成 18 年～平成 20 年 リーフレット「私たちの願い」発行（3 回）

（４）現在の神奈川県と同和問題の位置づけ

平成 25 年 かながわ人権施策推進指針を改訂する。

①指針の目標

人権がすべての人に保障される地域社会の実現をめざします。

②基本理念

- ・誰もが人権を侵されことなく、個人として尊重される社会をめざします。
- ・誰もが機会の平等を保障され、能力が発揮できる社会をめざします。
- ・誰もが個性を尊重されるとともに、孤立したり、排除されることのない、人と人とのつながりを重視した、共に生き、支え合う社会をめざします。

③分野別施策の方向

人権問題の解決に向けては、基本理念にのっとり、11 分野に分けて取り組みを進める。同和問題も、子ども・女性・障害者・高齢者・患者等とともに 11 分野の一つとして位置づけられた。

（５）現在の山北町の「人権」についての考え方

人権尊重のまちづくりの推進

（山北町第 5 次総合計画「後期基本計画」2019 年度～2023 年度）

第 1 項 男女共同参画社会の推進

■基本方針

男女が互いの生き方を尊重し、家事や子育てを役割分担するなど、男女がともに参画する社会環境づくりを進めます。（現状と課題・必要性は省略）

第2項 人権尊重のまちづくりの推進

■基本方針

国籍の違い、障がいの有無、性的指向等に関係なく、すべての町民の人権が尊重され、互いに認め合えるまちづくりを目指すとともに、差別がなく誰もが幸せに暮らすことができる地域社会の実現を目指すため、あらゆる機会を通じて人権教育及び人権啓発を効果的かつ継続的に推進します。また、関係機関、人権擁護委員等との連携を図りながら、人権相談に関する取組についても積極的に推進します。さらに、すべての町民の人権が尊重される明るく住み良いまちづくりの実現のため、町民とともに取り組みを進めます。

■現状と課題

- ・すべての人々の基本的人権が尊重され、平等で住み良い社会の実現を目指し、人権・同和啓発推進協議会の運営を図りながら、人権問題講演会の開催や啓発チラシの全戸配布、リーフレットの作成、さらに学校や幼稚園、保育園、こども園における幼少期からの人権意識を育てる教育や人権擁護活動などを継続して進めていきます。
- ・関係機関、人権擁護委員等との連携を図りながら、人権相談に関する取り組みについても積極的に推進する必要があります。
- ・町職員や教職員に向けた人権研修会や学校における人権意識を育てる教育を継続して進めています。

■人権尊重のまちづくりの推進

- ・多様化する人権課題について正しい理解と認識を深めるため、人権教育や町民啓発活動を継続します。
- ・人権擁護委員等と連携して人権相談体制の充実を図ります。
- ・自治会、議会、教育機関、関係団体により構成される人権・同和啓発推進協議会を中心に人権推進体制の充実を図ります。

■事業名

- ・人権啓発関係学習会等の開催
- ・広報紙、人権ちらし等による啓発活動の実施
- ・心配ごと相談、法律相談の充実
- ・人権・同和啓発推進協議会活動の充実

(6)「部落差別解消推進法」【施行についての前文より一部引用】

本法は、すべての国民に基本的人権の享有を保障する日本国憲法にのっとり、部落差別は許されないものであるとの認識の下にこれを解消することが重要な課題であることを鑑み、部落差別の解消に関し、基本理念を定め、並びに国及び地方公共団体の責務を明らかにするとともに、相談体制の充実等について定めることにより、部落差別の解消を推進し、部落差別のない社会を実現することを目的とするものです。特に、第5条において、部落差別を解消するため、必要な教育及び啓発について規定されています。また、衆議院及び参議院の各法務委員会において、付帯決議がなされております。

4 共和地区について

(1) 共和地区の歴史

北に大野山をいただく共和地区は、古くから山岳修行を行う修験者の行場（ぎょうば）とされた西丹沢の山々の麓に点在する山間の集落である。

鎌倉期以前にも、山麓を中心として人々が生活していたものと思われるが、山奥の集落は、「山家（やまが）」や「奥山家（おくやまが）」と一括して称されることが多かった。足柄の山々の杉は船材として重宝され、万葉集にも記載されている。杣人（そまびと：木を切ったり運び出したりする人）として林業に従事していたものと考えられる。

万葉集 0391「鳥総立て（とぶさたて） 足柄山に

船木伐り（ふなききり） 木に伐り行きつ あたら船木を」

国指定重要無形民俗文化財「山北のお峯入り」（昭和 56 年 1 月 21 日指定）の起源は、南北朝時代に後醍醐天皇の第七皇子の宗良親王が河村城に難を逃れた時から始まるという伝承も残されており、昭和初期には河村城が共和地区にあったと主張する有識者もいた。その名残として、古宿地区の雑木林には「河村氏表忠塔」や「建武中興六百年記念碑」と刻まれた石造物が昭和 9 年に建立されている。



なお、お峯入りは皆瀬川村の鎮守である神明社（以前は「大神宮」と呼ぶ）の祭礼に奉納されてきたものと言われ、記録に残る最も古い公演は、文久 3（1863）年 8 月 16 日とされている。8 種類 11 演目の歌や踊りが約 80 名の男性演者により演じられ、天狗、おかめ、山伏、殿様などの役割は、共和地区のそれぞれの家庭で代々引き継いできている。近年は 5 年毎に公演を行っている。

○共和村の誕生【明治 22（1889）年】

共和村	{	皆瀬川村	八丁・人遠・高杉・市間・古宿・鍛冶屋敷・深沢	の各地区
		都夫良野村	都夫良野・野背開戸・瀬戸・駒の子	の各地区

○共和地区の産業

- ・昭和 20 年頃までは、炭焼きや薪切り等の山林業が主流。稲作をしたくても平地がないという状況であった。
- ・大正 12（1923）年の関東大震災後、乳牛の飼育が始まり、昭和 25（1950）年に共和酪農業共同組合が新たに発足した。
- ・昭和 43（1968）年、県営大野山乳牛育成牧場が開場
- ・昭和 46（1971）年、大野山林道開通

○山北町との合併【昭和 30（1955）年】

合併当時の共和村の人口	117 世帯	703 人
令和 2 年 4 月 1 日時点	89 世帯	174 人

(2) 共和地区の現況

山北町共和地区は、神奈川県西部、西丹沢の麓の山あいにある集落で、山北町の中でも1番小さな集落である。令和2年4月1日時点で、89世帯174人で、山北町の人口(10,057人)の2%に満たない。

共和地区には、役場支所、郵便局などの公共機関がほとんどない。唯一あった町立小学校は平成23年に閉校し、その建物は平成28年、町立「共和のもりセンター」として模様替えをして地域の活動の拠点となった。地域の行事や会合等に利用されているほか、町民等各団体にも利用されている。

長い間公共交通機関(バスなど)の運行はなかったが、平成16年の1地区での先行実施に始まり、何度かの試行期間を経て、平成23年より町も関わって、共和のコミュニティーバスである、「共和福祉バス」の本格運行が始まった。当時の自治会役員の言葉「町がやってくれるのをただ待つのではなく、地域で出来ることは地域でやる。それでもダメな時に町に願います。自助・共助・公助の精神を大切にしたい」という言葉どおり、念願がなかった。現在は、子どもの通学、高齢者の買い物、病院通いなど、地域になくてはならない交通機関となっている。

(3) 多様な組織と活動

① 共和連合自治会(共和東自治会、共和西自治会の連合組織)

連合自治会は町との連絡調整が主な業務で、具体的には、町への自治会要望の取りまとめ、町長との座談会の設定、防災訓練などがあるが、共和全体に関することはすべてそのまとめ役として関わる。

※かつては5つの自治会があったが、過疎化の影響で自治会運営が難しくなり、平成25年度より上記の2自治会に統合し現在に至る。ただし、実際の地域活動(道路清掃など)は、統合前の自治会単位で行うこともある。

② 共和地区住民福祉協議会(平成4年12月発足)

この会の活動は「ふれあい活動」「広報活動」が主なもので、具体的には、ミニデイサービス、独居高齢者宅訪問、広報誌「ほほえみ」の発行があり、「ゲートボール大会」への助成も行っている。また、近年は小地域サロンを月1回以上行っている。予算の収入の主なものは、町社会福祉協議会の助成金である。役員は全て充て職で、自治会役員、民生委員、消防団長、共楽会長(老人会)、女性部、ゲートボール事務局などである。

③ 共和地域振興会(平成7年12月発足)

この会の目的は「共和地域の将来に対し、地域の開発、産業、教育等の振興と、よりよい郷土づくりを通じて地域住民の福利を図る」とあり、現在は共和の各団体(消防団、共楽会、女性部など)への助成、次世代育成事業として苗木の育成、環境整備(沿道伐採)などを行っている。役員は充て職が主で、自治会役員、財産区管理委員、その他有識者等である。※かつては専門部会として「過疎対策専門部会」を設け「宅地開発」「道路対策」「空家・空地調査」「意向・情報調査」など調査研究を行ったが、一定程度実態が把握できたということで、現在この部会はない。

④ 共和福祉バス運営会

運転手を中心にした、月1回の事務局会議では運行実績の確認、問題点・課題の確認をする。また、近年は新東名高速道路工事の責任者にも同席してもらい、バスの運行に支障のないよう、工事の進捗に伴う配慮事項を確認している。また、バス利用者も参加する年2回の道路清掃(エコの日)では、沿道の枯葉除去作業などに併行して、山ビル駆除剤の散布も行っている。

⑤夏祭り実行委員会

かつて夏祭りは、1地区でしか行われてこなかったが、小学校の閉校後、共和全体で取り組む夏祭り実施の機運が高まり実行委員会が設けられた（委員は老若男女40名程度）。

夏祭り実施の目的の一つに、共和出身で他地区に転出した若者等も、年に1回くらい郷土に戻って語り合おうという趣旨もあったが、共和の団体が主催する各種イベントで知り合った他地区の人たちも集う大きな祭りに育っていった。近年では、共和の人口以上の人たちが集まるほど盛況である。

祭りの特徴は、全て住民の手作りで行うということ。舞台設営、会場作りはもとより、演技者、夜店もプロは呼ばない。全て地区内の希望者を募り運営する。よって、出演料もなく、夜店も自己責任で運営する。また、前述の「福祉バス」の他、レンタカーなどを利用して駅からの送迎も行う。予算の収入の主なものは、ご祝儀である。（2020年度はコロナ禍で、残念ながら中止となった。）

⑥NPO法人 共和のもり（平成24年設立。現在の会員は40数名）

前述の「共和地域振興会」に法人格を持たせ、より幅の広い活動を可能にするために設立された。主な目的は、「共和地域の森林・農地の再生・活用・保全」「水源地域と水源下流地域の住民との交流を深める中で住民福祉の向上と生涯学習の充実を図る」などである。主な事業として、山北町と川崎市のパートナーズ協定に基づき、川崎の子どもたちに参加してもらう「水源地域交流事業」（間伐体験、薪割り、ヤマメのつかみ取り、そうめん流しなど）があり、共和でのイベントの他、川崎の小学校にも出前授業を行っている。その他、シイタケ菌打ち体験、木工体験、蕎麦打ち体験、藍染教室なども行っている。

（4）「お峯入り」の継承

【平成14年10月公演にあたっての、岩本喜明・保存会会長挨拶より】

国指定重要無形民俗文化財「山北のお峯入り」（昭和56年指定）は、山北町の共和地区に古くから伝承されている民俗芸能です。その起源は、「南北朝時代に宗良親王が河村城に難を逃れられた時にある」と伝えられています。

お峯入りの保存・伝承にあたって、私共の先祖は全村から等しく演技者が出るよう配慮したり、それぞれの役柄を各地区、各家に割りあて、親から子へ、そして孫へと伝えさせるとか、さまざまな工夫や知恵を働かせて来ました。

お峯入りの公演には演技者だけで80人の男子を要し、そのうえ演技の習得も大変で、経費も多額なものが必要となるため、文久3（1863）年から現在迄の140年間に16回しか公演されておられません。

演技は、演技者全員が行列を組み、会場を一巡する「道行き」から始まり、8演目、11種類の歌舞が演じられます。各演目は、それぞれが独立しており、その間には何等のつながりも筋もありません。このように、演目の集合体ともいえるお峯入りが、私共をひきつける最大のものは、演目の順序、組み立て方の素晴らしさにあるのではないかと思います。能と狂言のように、厳粛なるもの、静かなるものの次に、華やかで滑稽で動的なものを置いていく妙です。古典は何時の時代にあっても、観る者の心に応じて様々の微笑を与えてくれます。（後略）

※山北のお峯入りを含む「風流踊（ふりゅうおどり）」は既にユネスコ無形文化遺産に登録されている三浦市の「チャッキラコ」の拡張登録として提案中です。

*「風流踊」は、広く親しまれている盆踊や、小歌踊、念仏踊、太鼓踊など、各地の歴史や風土に応じて様々な形で伝承されてきた民俗芸能。華やかな、人目を惹くという「風流」の精神を体現し、衣裳や持ちものに趣向をこらして、笛、太鼓、鉦などで囃し立て、賑やかに踊ることにより、災厄を祓い、安寧な暮らしがもたされることを願うという共通の特徴をもつ。

5 共和地区住民へのアンケート調査の実施

(1) 調査の目的

中山間地に集落が点在し、過疎化・高齢化が急速に進む共和地区では、町内の他地区に比べ様々な組織・団体等が縦横に関わり合いながら、地域の活性化に取り組んでおり、また積極的に移住者を迎え入れる等の対策も講じている。この共和地区の住民に対し、現状に対する認識や将来に向けての意向等を調査し、当面する課題を把握することを通して、今後の社会教育のあり方を考える。

(2) 調査対象

共和地区の 89 世帯 174 人（令和 2 年 4 月 1 日時点※住民台帳より）の内、調査時期に施設等への入所や入院、あるいは他地区に住む家族との一時的な同居等で不在の方を除いた中学生以上の住民 156 人を調査対象とした。

また、概ね 10 年以内の移住者 13 人には「移住者用アンケート」を、移住に関わった方 7 人には「移住に関わった方用アンケート」を配付した。

(3) 調査時期

令和 2 年 4 月中旬～下旬

(4) 調査方法

共和地区連合自治会に依頼し、自治会役員等が全世帯に必要な人数分のアンケート用紙を配付し、後日回収した。なお、移住者及び移住に関わった人に対しては、共和地区の社会教育委員が直接配付し回収した。

【配付数（調査対象者数）】

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代以上	計
男性	2	6	4	7	7	20	18	12	76
女性	1	9	5	4	12	14	17	18	80
計	3	15	9	11	19	34	35	30	156

【回収数】

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代以上	年代不明	計
男性	2	5	1	5	5	14	17	10	1	60
女性	1	6	2	4	12	13	16	9	0	63
計	3	11	3	9	17	27	33	19	1	123

(5) 回収率

合計 78.8%（男性 78.9%、女性 78.8%）

(6) 調査内容（質問項目）

【全対象者】

- ① 共和地区は住みやすいですか。《自由記述欄》
- ② ①の質問で答えた理由をおたずねします。（複数回答可）《自由記述欄》
- ③ 共和地区で自慢できることは何ですか。（複数回答可）《自由記述欄》
- ④ 地域の行事に参加しますか。
- ⑤ 最近（過去1～2年）参加した行事は何ですか。（複数回答可）
- ⑥ お峯入りの継承についておたずねします。
 - （ア）継承していくには何が大切ですか。（複数回答可）《自由記述欄》
 - （イ）継承するうえで何が難しいですか。（複数回答可）《自由記述欄》
- ⑦ 共和地区の今後の課題は何だと思えますか。（複数回答可）《自由記述欄》
- ⑧ 共和地区の各組織や団体、行政への要望は何ですか。《自由記述のみ》
- ⑨ 世帯主のみへの質問
 - （ア）共和地区にいつから住んでいますか。
 - （イ）家族構成についておたずねします。
 - （ウ）子どもが他地区に住んでいる方におたずねします。子どもが他地区に住んでいることについてどう思いますか。

【移住者】

- ① 移住のきっかけや目的は何ですか。（複数回答可）《自由記述欄》
- ② 共和地区の好きなところは何ですか。《自由記述のみ》
- ③ 移住者を増やすために、何が必要だと思えますか。《自由記述のみ》
- ④ 移住して困ったことや悩んだことはありましたか。《自由記述のみ》

【移住に関わった方】

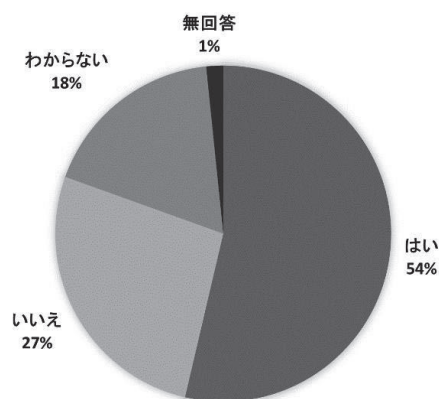
- ① 移住してもらうために、どんな働きかけや条件整備をしましたか。《自由記述のみ》
- ② 共和地区の良いところは何だと思えますか。《自由記述のみ》
- ③ 移住者を増やすためには、何が必要だと思えますか。《自由記述のみ》

6 アンケート調査から読み取れる住民の意識とは

(1) 「共に生きる」そして「地域で生きる」

平成の時代がスタートした頃の共和地区は、世帯数 92 世帯、人口 360 人（平成元年 4 月 1 日時点）であったが、令和 2 年 4 月には世帯数 89 世帯、人口 174 人となり、約 30 年の間に人口は半減している。もっとも、この間の山北町も世帯数こそ 3,707 世帯から 4,218 世帯と増加しているものの、人口は 14,291 人から 10,057 人へと大きく減少している。その中でも町内の他地区に比べると、共和地区の人口の減少率は格段に大きいと言わざるを得ない。

山間地に小さな集落が点在するという自然環境、そして公共交通機関や商店等が無いという社会環境下においても、住民の半数が「住みやすい」と回答している。【グラフ①】

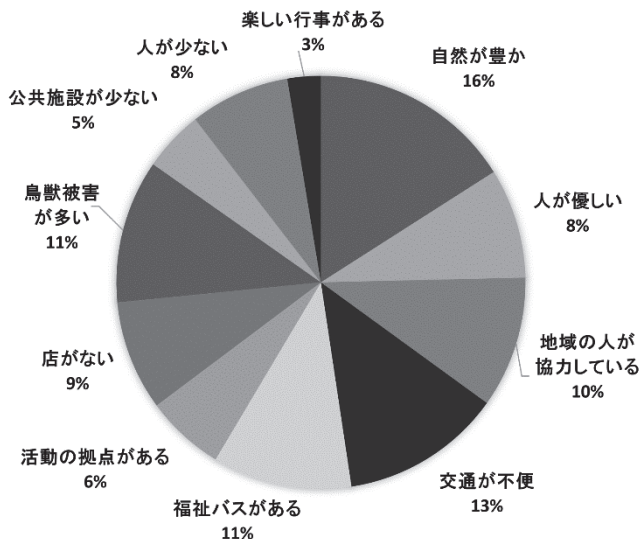


グラフ① 共和地区は住みやすいですか。

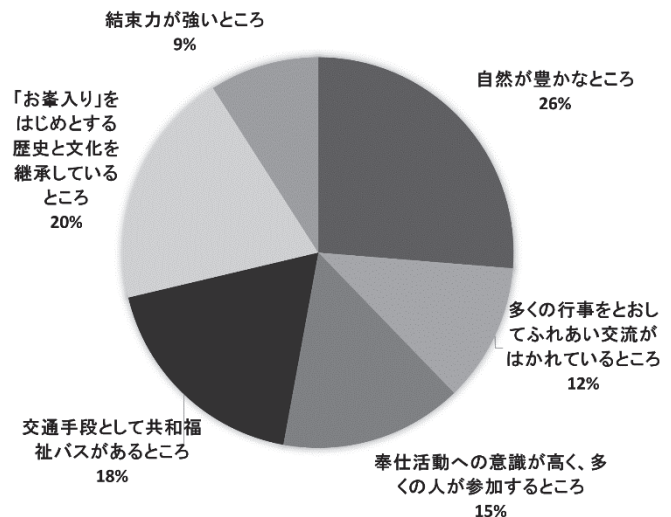
その理由としては「自然が豊か」「福祉バスがある」「地域の人が協力している」「人が優しい」等を挙げているが、反面では「交通が不便」「鳥獣被害が多い」等の「住みにくさ」を指摘する声も多い。【グラフ②】

山間地での生活のメリット、デメリットが如実に現れた回答ではあるが、自然環境や社会環境を十分に受け入れてのあるがままの姿がそこに映し出されているようにも感じる。

また「住みやすさ」の理由に関しては、『共和地区で自慢できること』【グラフ③】とほぼ同様の回答であり、「お峯入りの継承」という歴史的・文化的な活動も含め、地域の中で、そして限られた環境の中で、かなり主体的・意欲的に生活をしているのではないかと考えられる。



グラフ② 「住みやすさ」「住みにくさ」の理由は。



グラフ③ 共和地区で自慢できることはなんですか。(複数可)

自由記述欄に「既に限界集落に入っている」との指摘があるように、これは山北町の共和地区に限ったことではないが、社会動向の現状を考えると、地方における過疎化・高齢化の流れは今後も一段と加速するものと考えられる。

こういった状況下において共和地区をながめてみると、回答のあった74世帯の内、先祖代々住んでいる43世帯、終戦後から生活を始めた11世帯を合わせると、約7割が先住者となる。これらの世帯には比較的高齢者が多く、ややもすると保守的な傾向を示すことも多いと考えられるが、共和地区では平成に入ってから移住してきた住民ともうまく混じり合って生活していると感じ取ることができる。

このことは、こういった地域だからこそ、お互いに助け合って生きていくことの重要性や地域の特性を活かして生きていくための知恵や創造が必要という暗黙の共通理解が住民の間に流れているのではないかと予想ができる。

(2) 過疎化・高齢化との対峙

共和地区には山北町立共和小学校があったが、児童数の減少により平成23年3月に閉校となり、その跡地は「共和のもりセンター」として地域の様々な活動の拠点として活用されている。令和2年4月時点では共和地区の小中学生は4人（小学生3人、中学生1人）で、山北町立川村小学校と山北町立山北中学校に通学している。少子化が如実に現れている地域とも言える。

この少子化や高齢化、そして過疎化という大きな課題に立ち向かうのは容易なことではない。ましてや一地方の一地域で対応しようとすると、人的にも物的にも大変な努力と苦勞が必要になってくる。

こういった状況下での取り組みの一つが、移住者を積極的に呼び込むという事業である。

移住には二つのタイプがあり、共和地区の自然環境に惹かれて趣味や仕事に取り組むという人達と、共和地区の住民に声をかけられて移り住むという人達に分けられる。

一般的に移住という概念は、退職後に余生を過ごすという意味合いが強いが、共和地区への移住者は若い世代が比較的多く、かなりの目的意識を持って移り住んでいる人たちが多くと感じられる。



もう一つは福祉バスの運行である。共和地区は山間地域であり、道路が狭く、坂道も多いこともあって、従前からバス等の運行はなされてこなかった地域である。それでも地元小学校があり、高齢化もそれほど進んでいなかった時代は何とか対応できたが、高齢化率が高くなり(令和2年4月時点の共和地区の高齢化率は54.02%、町全体では39.61%)、また小学校も閉校となり、通学や通院などを含め、生活する上での不便さが際立つようになってきたのである。

そこで、住民の不便さを解消するために平成16年に一部地域限定によるコミュニティバスの運行の試行を開始し、その後、紆余曲折を経て共和地区の住民と町との協議により「共和福祉バス運営会」を設立し、平成23年4月から本格運営となり、現在に至っている。各世帯は年間2,000円の会費を払い、誰もが自由に利用できるようになっている。

前述したように少子高齢化・過疎化という問題は、一地方の小さな組織で対応するのはかなりの難題と言わざるを得ない。国としても有効な解決策を見い出せないというのが本音であろうと思う。では、坐して待つのかということになるが、高齢化率が益々高くなる我が国において、悠長なことは言ってはいられないのも事実である。

目の前の大きな壁の一部に風穴を開けようとする共和地区の取り組みは、黄昏時に夕日を覗いているような明日への僅かな希望に繋がる実践であると感じ取ることができる。

(3) 移住者を交えての地域活性化

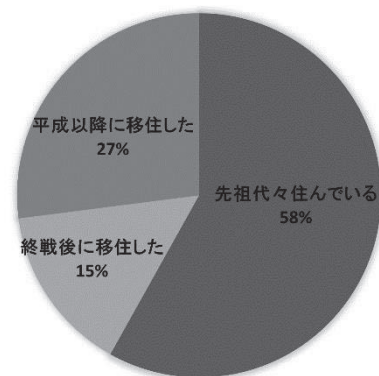
最近マスコミでも「地域再生」や「地域の資源を活かす」等の見出しで全国各地の多様な取り組みを紹介している。高度経済成長の頃からの人口の都市集中化と共に地方の過疎化や農林業従事者の高齢化等の問題も重なり、耕作放棄された農地や荒れ放題となった里山や山林が多くなり、官民を問わず大きな課題となっているからである。

共和地区も決して例外ではない。里山や山林、そして農地の荒廃は鳥獣被害はもとより、大きな自然災害にも直結する重要な問題となっている。アンケートの自由記述においても災害に関する不安を述べている住民が多い。

地域再生や地域の資源を活かすためには、新しい風を吹き込むことや異なる視点から地域を見つめなおすことも重要である。こういったことから、共和地区では積極的に移住者を求めるようになってきた。【グラフ④】にもあるように、平成時代以降に転入した世帯は、回答のあった74世帯の内、20世帯、約27%となっている。

このうち比較的新しい移住者10人には別途個別にアンケート調査を行っているが、その内の8名は「共和地区でやりたいことがあった」と回答し、具体的には山地酪農(やまちらく)や林業、農業、木工や染め物等多岐に渡っている。

紹介されて移住した人や、自らの意志で移住した人々がスムーズに地域に溶け込み、共



グラフ④ 共和地区にいつから住んでいますか。

に生活できているのが共和地区の良さとも言える。「先住者の人柄がよく、比較的住みやすい」という声がそのことをよく表している。



移住者と共存するためには、迎え入れる側の体制作りや環境作りが重要ともなってくる。共和地区では地域のリーダー的立場にある人達が受け入れるための空き家の整備や交流の場の設定など、地域ぐるみで対応を積み重ねてきている。

町内の他地域では、移住者と先住者との間で少なからず軋轢が生じることもあるように聞くが、共和地区では一部に「差別意識を感じる」という回答があるものの、大きな障害とはなっていない。

地元の不断の努力と移住者の積極的な地域への関わりにより新たなコミュニティが創造され、地域が活性化していくものと考えている。

(4)精神的な土台となる「お峯入り」の継承

共和地区としては最も重要な行事として「お峯入り」が世代を越えて継承されている。詳細は前述されているので省略するが、私たちはこのお峯入りの継承こそが共和地区の精神的な支柱となり、共同体意識を培ってきたのではないかと考えている。

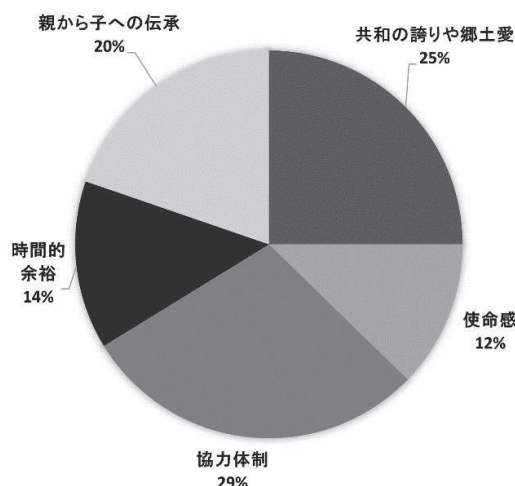
【グラフ③】にもあるように、『共和地区で自慢できること』の中では、「自然の豊かさ」に次いで「お峯入りをはじめとする歴史や文化の伝承」の割合が多くなっている。

南北朝時代に起源をさかのぼるという伝承も残るお峯入りは、記録に残る最古の公演が江戸時代末期であり、それ以後、現在に至るまで17回公演されている。最近は「山北のお峯入り」と称しているが、10年程前までは「共和のお峯入り」であり、共和地区独自の伝統芸能として、記録に残る以前も含めると何百年にも渡り、連綿と受け継がれてきた重要な行事なのである。

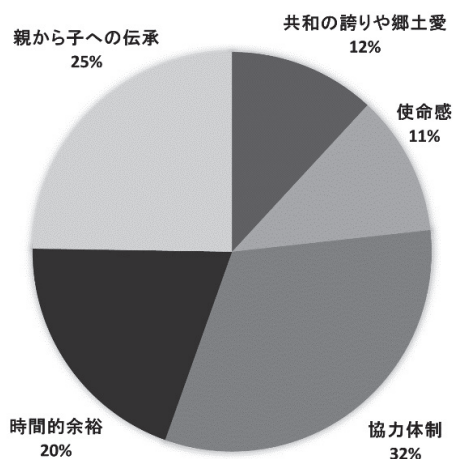
このお峯入りを実施するためには、演者だけでも80名ほどが必要とされ、しかも全て男性が担当することとなっている。一方で、地域の女性は、演者のための衣装の直しや着付け、化粧等事前の準備を含め、裏方として大切な仕事を分担することとなっている。

そしてもう一つ重要なことは、各種の演技は各世帯に役割が割り振られており、先祖代々それぞれの家庭で継承していくことが基本となっているのである。

かつてのように、住民が多い時代ならともかく、現在のように人口が減少し、高齢化が進む中での継承は厳しい状況下にあると言える。それでも、アンケートでの『継承するためには何が大切か』という問いかけには、「協力体制」54%と「共和の誇りと郷土愛」46%と高い割合を示しており、課題を克服し



グラフ⑤ お峯入りを継承していくには何が大切ですか。



グラフ⑥ お峯入りを継承する上で何がむずかしいですが。

つつ継承しようとする意志は強いものと判断できる。次代を引き継ぐ若い人達が他の市や町で生活する家庭も多くなり、最近の公演では離れて暮らす子ども達をその都度呼び集め、何とか 80 名を確保する状態が続いている。アンケート調査でも「協力体制の維持」とともに「親から子への伝承」を危惧する声も多くなっている。現在は 5 年に 1 回の公演であり、「親から子への伝承」と同時に「技能の伝承」も課題となってきたようで、自由記述欄にはそういった指摘もなされている。

人口の減少や少子高齢化が進む状況下でのお峯入りの継続・継承は、地域にとっての重要な課題でもあり、難題でもあるが、前述したようにお峯入りにより地域の縦横の繋がりが強化され、地域全体のまとまりが維持されてきたのではないだろうか。

これまでもいくつかの課題をその都度克服し、乗り越えてきた共和地区は、それなりのたくましさと同時に、数年前に文教大学の学生が地域の調査を行った際に、「共和地区には宝がある」と表現しているとおおり、未知の可能性を秘めた地域であるとも言えそうである。

7 これからの時代の社会教育のあり方とは

(1) 地域共同体意識の醸成

かなり以前から「地方における都市化現象」という言葉を、マスコミが採り上げるようになってきた。昭和 30 年代の後半から 50 年代にかけて、高度経済成長という未曾有の発展をとげた我が国ではあるが、その反面では人口の都市集中と地方の過疎化、核家族の増加と自己中心主義の台頭、経済至上主義と格差の拡大等の、言うなれば負の部分もあらわになってきた時代であったとも言える。

最近では少子高齢化や過疎化により、全国各地で住民の心の支えとも言うべき小中学校の統廃合が進み、地域の一体感が薄れつつあるという声も聞くようになった。また最近では SNS を利用した心ない排他的な誹謗中傷も増加傾向にあり、人々の心を繋ぐ糸は益々細くなっているようにも感じとれる。このように世の中が大きく変化しつつある中において、都会のみならず地方においても次第にコミュニティを維持する機能が減少してきたのではないかと危惧されている。

コミュニティを広辞苑で引くと「一定の地域に居住し、所属意識を持つ人々の集団・地域社会・共同体」と記されている。ここで重要なのは「所属意識」である。もともとが農耕民族である我が国では、集団に帰属することが唯一生き残る手段であり、農村を中心に「結い」や「講」という組織が作られ、互いに助け合い協力しながら生活を続けてきたという長い歴史がある。強制される所属意識ではなく、個々の住民の主体的な所属意識をどのように構築していくかは、社会教育の充実のみならず、地域の活性化を図る上でも重要な課題と言える。

「所属意識」を測るのは難しいが、ここでは共和地区の各種行事への参加率で考えてみたい。アンケート結果では、「行事によく参加する」「参加する」は合わせると 52% となり、辛うじて半数をしめている。どのような行事に参加しているかを参加率の高い順に並べたのが、次の表である。

行事名	防災訓練	夏祭り	エコの日	環境整備	道づくり	どんど焼き
参加率	63%	54%	48%	45%	43%	42%

夏祭りやどんど焼き以外には、いわゆる地域の共同作業的な行事が上位をしめている。家族で参加できる夏祭り等の行事と、原則各世帯 1 名の参加による作業的な行事とを一律

に比較することには無理があるが、集落が点在する山間部の過疎地域としては、比較的まとまりがよいのではないかと考えられる。ただこの行事に関しては、自由記述欄には多くの意見が寄せられている。「高齢化で参加が難しい」「行事が多すぎるので精選すべき」あるいは「組織が多いので再編すべき」と言うような声も多く、今後の検討が必要であろうと思う。

令和2年8月5日、朝日新聞の声欄（投書欄）に「所属意識」に関わる投稿が寄せられている。問題提起をしたのは地方に住む80代の男性で、「自治会での共同作業は時代遅れなのか？」という問いかけであった。

投稿者の主旨は「地域にある神社の境内の芝生撤去や砂利の敷設は、地域住民が協力して実施すべきであり、業者任せでは折角の絆づくりの機会を失う」という内容であったが、最近では米作りも業者に委託する農家が多くなり、「金を払えば済むことだ」という声で決定されてしまったそうである。

この「自分の考えは古いのか？」と自問自答する男性に対し、50代から80代の男女5名が応える形で投稿しているが、その多くは「共同作業を、交流や絆を深める場として続けるのは望ましいが、少子化・高齢化が進む昨今、各世帯の負担になっているのではないかとし、時代の流れに応じて業者に委託することがあっても、やむを得ないのではないかと意見を述べている。

このような考え方が地域住民の一般的な、あるいは標準的な意向とするならば、地域のリーダー達はアンテナを高くして、今までの諸活動を振り返る必要が出てくる。

俳句の世界に「不易と流行」という言葉があるように、時代の流れに応じて変えていってもよいものと、変えていくべきではないものとを熟考すると共に、住民の意向を汲み上げて創意工夫をし、負担が加重とならないように配慮しつつ、**共に生きる**地域社会づくりを目指していく必要があるのではないだろうか。

5名の投稿者のうちの1名が「共同作業は義務か楽しみか？それは地域を誇りに思えるか次第だと思っている。」と述べている。地方では少子化・高齢化・過疎化と、まるで三重苦のような状況ではあるが、居住する地域への愛情や誇り、そして**共に生きる**ことを住民が確かめ合うことにより、忘れかけていた**地域共同体意識**を取り戻すことができるのではないかと考える。

（2）地域を活かす（地域の宝）

日本の原風景とも言われる農村や里山のみならず、開発が進む大都市の近郊や大都市の中心部においても、そこに住む人々にとっては「ふるさと」と言える場所である。古きよき時代を回顧するだけでなく、居住する現在の地域を見つめ直し、新たな視点で地域の良さを再認識してみてはどうだろうか。

平成時代の市町村の大合併により、特に地方では多くの町や村が吸収合併されたが、その多くが行政機関の縮小や学校の統廃合等により、活気を失うと共に過疎化が一段と進むという現象がおきている。子ども達は中心部の学校までスクールバスで登下校するため、周辺のお年寄りとの接触が少なくなったという声もある。地域社会が様変わりをし、以前に比べると人と人との関わりが希薄になっている状況において、地域の良さを再認識するのは難しい作業とも言えるが、地域を活性化させるためには避けて通れない道筋であると言える。

こういった中で、地方によっては荒廃した里山の再生に取り組んだり、都会の子ども達を山村留学として積極的に招いたり、あるいは地域ぐるみで移住者を受け入れるというように、様々な工夫や努力を重ねながら、地域の良さの発信や定住促進に力を注いでいる地方自治体やNPO法人もある。

日常的に生活をしている住民にはよく判らなくても、他の人々の眼から見るとその地区のプラス面が見えることもある。共和地区に調査に入った学生が「共和地区には“宝”がある」と言い残したことや、またその学生の中には卒業後に共和地区に移住した若者がいることなどがその例である。どこの地域でも、歴史や文化、民俗関係や自然環境、更には人的環境等々を含め、隠れている“宝”があるのではないだろうか。

私たちが住む山北町でも、NPO 法人や地域団体等が山北町の良さの発信を行っている。活動事例として、旧東海道線の時代の「鉄道遺産」や中世に築かれた「河村城」を中心とする歴史関係、「お峯入り」や「流鏑馬」、「百万遍念仏」等の無形民俗文化財、近世の水との戦いとも言える「酒匂川と用水」等についてのパンフレット作成などがある。

この取り組みは新住民を含めた地域の人々に**わが町・わが地域**の良さを再認識・再発見してもらおうと共に、他の地域にも発信し、**地域を見直し、活かす**活動の一環として位置づけ、スタートしたものである。

自分たちが生活する地域の自然や文化、歴史、習俗等を新たな視点で見直すことにより、見過ごしていたり或いは気付かなかつたりした事象に出会うことはあり得るであろう。それが**地域を活かす**きっかけとなることを願っている。

（３）“核”となる活動の継続

学校教育以外の場で、青少年及び成人を対象として行われる組織的な教育活動を社会教育と呼んでいる。山北町では平成 30 年 3 月に「子どもから高齢者まで、生涯にわたり学び、生きがいのある充実した人生をおくることができる生涯学習社会の実現」という基本目標を掲げた『山北町生涯学習推進プラン』を策定し、その具現化に向けて取り組んでいる。

この基本目標に基づき、さまざまなサークルや団体・組織が主に生涯学習センター等の公的施設を利用し活動を行っている。あくまでも意図的・計画的な教育活動であり、最終的にはそれぞれが自己実現を目指すという有為な活動でなくてはならない。「活動していれば何でもあり」という風潮が無きにしも非ずだが、この**意図的・計画的、そして自己実現**というキーワードを肝に銘ずるべきであろう。

ここでは、大勢の住民が関わる地域ぐるみの活動について述べたい。前述した共和地区に業者等が介在しない手作りの夏祭りや、江戸時代から続くお峯入りという大きな行事があったように、全国各地で地域に根ざした多様な行事が展開されている。

元をたたせば、神社仏閣の行事に由来するものや、古くからの歴史に起因する行事、あるいは民衆の側から沸き起こった行事等、その趣旨や形態は多種多様ではあるが、連綿と続けられてきた背景には、地域の一体感や連帯感、そして所属意識を維持し、継続させようとする意図があったのではないだろうか。

山北町では、少子化や子ども達の生活の変化等により、10 年程前から子ども会活動が衰退し、各地域にあった婦人会も縮小され、更には個人情報保護等もあって、地域の縦横を繋ぐ糸は目に見えないほどに細くなっている。こういった現状において、唯一地域の人々が顔を合わせる機会が、神社の祭礼や地域の夏祭り等のやや規模の大きい行事のみとなっている。

地域が一丸となって取り組むことができる地域の“核”となるような活動を大切にし、継続していくことが求められてくるのではないだろうか。同じ場所に集まり、同じ時間を過ごし、そして一体感を共有するという重要な場面を、特に主催する側が意図的に構築しなければならないと思う。

(4)人口減少や高齢化への対応

過疎化や少子高齢化という大きな問題は、一地方や一地域で取り組めるような課題ではない。国として考えるべき課題であろう。我が国では高度経済成長をなし終えた昭和時代の末期頃から、有識者の間で少子高齢化の時代が迫ってきているという指摘がなされていた。同時期に同じような状況下にあったフランスは、第2子、第3子と子どもが増えるほどに税率が低くなり、育児休暇に対する所得補償や出産費の無料化、非正規雇用者や低所得層の教育費の軽減等々適切な対策を講じたが、我が国は有効な対策を打ち出せなかった。

このままでは更なる少子高齢化時代となってしまうそうである。山北町でも住宅地の周辺で遊ぶ子ども達の声が聞くことが少なくなり、高齢者のみの家庭や一人住まいの世帯も多くなって、生活弱者や交通弱者が増えているのが現状である。

町としては子育てへの支援や循環バスの運行、定住を促進するための様々な対策等に取り組んではいるものの、人口減少を押し止めるまでには至っていない。

こういった状況下において一地域でできることは、共和地区のように手探り状態で草の根的に口コミで移住者を増やしていく方法や福祉バスを運行して、高齢者の移動手段を確保する等という取り組みに限られてくるのではないだろうか。そのためには、空き家の管理や整備、福祉バスの維持管理等人手や費用が必要となってくるが、できることから少しずつ解決をしていくことが、集落の維持、そして地域の維持に繋がってくるのではないかと考えている。

私たちはこの世に誕生してから、**多くの人々、さまざまな物、いくつもの出来事**という「ひと・もの・こと」と関わり、そこから多くのことを学び取りながら、人としての成長を遂げていくと言われている。社会教育もその一端を担っているわけであるが、人と人との関わりが薄れ、経済格差も拡大し、「共に生きる」「共に育てる」という意識が低下するという社会状況を考えると、特にこれからの時代を生きる青少年に、**生きる術**をしっかりと身につけさせることができるのか、生き方を学ぶ機会を与えることができるのか、甚だ心配な状況下にあると言えるのではないだろうか。

(5)行政のバックアップ

どこの自治体も学校教育と同様に、社会教育にも重点をおいて取り組んでいる。学校教育を終えてからの長い人生をどのように有意義に過ごすかという問題は、自己教育力を高めるだけではなく、地域全体の活力にも繋がる大きな原動力ともなり得るからである。

私たちは老いも若きも学び続ける意欲を持ち続け、意図的・計画的にさまざまな活動を継続し、自己肯定感を体感しながら、そのすそ野を拓げていかななくてはならない。

社会教育を充実させるためには、行政の支援が必要となってくる。青少年から高齢者までという幅広い年齢層を対象とするため、それに対応できる指導者やリーダーの養成という人的環境の整備をはじめ、多様な活動を実践するための施設や場所の確保等の物的環境の整備、そして活動をより充実させるための予算の確保等々である。

共和地区の自由記述にもあった生活道路の整備等の要望も、広く考えれば人々の交流や活動を支えるためであり、社会教育活動に直結する課題であるとも言える。

経済が低迷し、各自治体の財政は厳しい状況ではあるが、将来を見据えた長期の展望にたった政策の立案と何にお金をかけるかを住民を交えた中で十分に検討してほしいと願う次第である。

昔から教育は「国家百年の計」とも言われ、また戊辰戦争当時の越後長岡藩には「米百俵」の逸話も残っているように、先人達は教育の重要性を十分に認識していたのである。私たちも学校教育・社会教育を問わず、新たな気持ちでこれからの時代に即応した教育に重点を置き、取り組んでいきたいと考えている。

8 山北町の魅力の発信

共和地区に移住して①

林業 富田 陽子

「森林に関する仕事がしたい。森と人をつながたい。」この思いを実現できる場所かもしれない。これが共和地区に移住した理由です。

中学生の頃から森林に関わる仕事に就きたくて、山形大学の農学部で森林や環境について学びましたが、もっと山のことが知りたくて三重県の林業の現場に飛び込みました。実際働いてみると学校では教えてくれなかった補助金頼みの林業を目の当たりにしました。補助金申請の事務が増える毎日に嫌気がさし、補助金で山がよくなっていると実感できず、5年ほど働き一旦林業から離れました。

その後、気分転換で旅をしたオーストラリアのキュランダ村で、熱帯雨林再生をしているグループに出会い、働かせてもらえることに。そこでは自分たちの地域の森に、種を集めて苗木を育てることから森を再生していました。日本でもこんな森づくりがしたい、活動できる地域に移住したい。そこで縁あってたどり着いたのが、共和地区の森づくりです。

共和地区では財産区の山を自分たちの山だということを再認識し、雇用を生む森、動物と共存できる森、災害に強い森づくりを住民で始めていたところでした。苗を植えてもシカに喰われたりと失敗の連続ですが、私自身も勉強しながら森づくりの一端を担い、2016年に移住して5年になります。現在は、来た当初植えたクヌギ・コナラの苗木がやっと自分の背丈を超えるくらいまで成長しています。今後は、森づくりを進めつつ、スギややむなく伐られてしまった木々を、町内をはじめとした多くの人に使ってもらえるようにしていきたいです。

私生活では、大学の同級生であるパートナーも移住をし、共に林業と稲作をしています。2018年に結婚し、息子も生まれ2歳5か月になりました。まさか2人で林業をやるとは想像していなかったのですが、学生時代に話していた自給自足を目指した暮らし方は、少しずつ実現しています。自分で切った木を使いエネルギーも自給できる家を建てるのが夢です。

ここは様々な動植物が生息し、水がきれいで豊かでとても美しいです。でも昔の話を聞くと、皆瀬川には30年ほど前にはウナギがいて夏には釣りに行ったとか、あちこちでホタルがみられたなど、昔はもっと自然豊かで、それがだんだんと失われつつあるなど感じています。東京で育った私は大人になるまで野外でカブトムシさえみたことがなかったです。ここにはお金では買えないおいしい水や生活を豊かにしてくれる生き物たちがいます。子どもたちに豊かな自然を残したり、失われたものを復活させて自然の中で思いっきり遊んでもらいたいです。こんな思いを実現させていけたらと思っています。

共和地区に移住して②

薫る野牧場 花坂 薫

私は、2016年10月に山北町共和地区に移住し、2018年4月から共和財産区の山（8.8ha）をお借りして、同年6月より山地（やまち）酪農を行っております。

出身は相模原市ですが、高校時代に駅伝の大会で毎年丹沢湖に来ていました。東京農業大（北海道網走キャンパス）で食品製造について学んでいた中で、「黒い牛乳（中洞正著）」という本に出会い、山地酪農を実践する中洞牧場（岩手県岩泉町）へ行き、卒業後の4年半の間に働きながら多くのことを教えていただきました。

いずれ自分で山を買うか借りるかして山地酪農を始めたいと考えていたころ、共和地区の数名の方が、同じく中洞正氏の著書で山地酪農を知り、2016年3月に閉鎖になる県立大野山乳牛育成牧場の跡地利用について、中洞氏に相談をされていると聞いた私は、ぜひ大野山の土地を使わせてほしいとお願いしました。

まず共和地区に住まわせていただくにあたり、地域で運営していた売店の建物を改装していただき、共和のもりセンターやかどやファームさんでのお仕事を紹介していただくなど、少しずつ地域のことを知りました。すでに共和地区には20～30代の若者が複数名移住していたこともあってか、地域の方々は私のことも温かく迎えてくださり、畑で採れた野菜やごはんのおかず、お菓子やみかんをいただいたり、よく気にかけて声をかけてくださったり、牛を飼うにあたっての相談を親身になって聞いてくださり、とてもありがたく思っています。

私と同じように、中洞牧場を出て独立しようと全国各地に散らばった仲間や先輩が、なかなか地域の方の理解を得られず苦労しているといった話をよく聞いていたので、それなりに覚悟していたのですが、多くの方に応援していただけたお陰で、無事に自分の牛を迎えることができました。このあたりでは少し前までほとんどのお家で牛を飼い、共和牛乳を作っていたという歴史の背景もあるのかもしれませんが。

また、共和地区の方々だけでなく、山北町のいろんな方に気にかけていただいていると感じております。ソフトクリームや牛乳等の販売をしてくださるお店の方や、それを買ってくださる方、どんなことでも相談に乗ってくださる方、もちろん、日々の牧場作業を手伝ってもらっている20代の2人（共和地区移住者）等、挙げればきりがありません。

まだまだ山地酪農は全国的にも数少ない酪農手法のために、メディアの取材を受けることもある中で、「女性一人で牛を飼っている」と表現されてしまうことが多かったのですが、私は必ず「共和地区や山北町の方々に助けていただいているので、一人でやっているという書き方はしないでほしい」とお伝えしています。

外から来た私にとって、共和地区の方々はもちろん、山北町の方々は、みなさんが思っている以上に大きい存在です。この土地に移住して、本当に良かったと思っています。

これからも、私のような人間を応援していただけたら嬉しいです。

9 共和地区の行事に参加して

(1) 夏祭り

報告者：山北町社会教育委員 関 優子

取材日：令和元年8月11日（日） 場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

山北町の地形は、森林に囲まれている。それらを生かすことで、町が成り立っている部分があると思う。まさに共和地区はその先端を行っている。一年に一回の大きなイベントとして森林に感謝をする気持ちと仲間・地域に感謝する気持ちで賑やかに夏祭りを毎年行っている。

今年は、看板の文字を昨年より大きく描いていたが、これも共和をもっともっと大きくするという願いを込めたものだそうだ。また、今回の夜店は、すべて手作りの店での屋は一軒もなく、ここでも新しく「射的店」を増設し、全部で9店舗となった。「焼鳥店」では、一家で祭りを盛り上げ、小学生の子が大きなカードをもってお客さんに声をかけていた。ほっこりした雰囲気の中で、とてもおいしい焼き鳥を味わえた。

他地区からも演者が何人か来られ、踊りや歌を披露された。ソーランをしている団体は、声がかかり喜んで来させてもらったと言う。出演された団体はすべて出演料はなしである。

ステージ発表も、子ども、若者、お年寄りまでが喜ばれるよう工夫されたジャンルの広いプログラムで構成されていた。私も個人的に学生時代に流行した歌などを聞き、タイムスリップしてしまった。この祭りがまるで、都会に来たようで、山の中で開かれたとは思えなかった。町内で最も世帯数が少ない地域であるのに関わらず、すごい団結力を感じると同時に人や地域を大切にしている思いが伝わってきた。

また、共和小学校が閉校になってからも、建物を生かして上手に工夫したり、川崎市の方とは、共に仲間として交流会やそうめん流しなどを積極的に実施したりしている。これらの取り組みは、山北の人口増につながっていくきっかけとなるのではないかなと思う。

今回このようにたくさんの人たちが参加されているのを見て、都会から参加された方には、共和地区の自然の豊かさや人の温かさを感じながら、これからもずっと、このつながりを大切に、ゆったりと心をいやしてほしいと思う。共和だけでなく、他の山北の地区も自然の豊かさや人のつながりを大切にしている「山北の良さ」をPRしていくことが大切なことだと思う。



(2) 夏祭り

報告者：山北町社会教育委員 瀧澤 康子

取材日：令和元年8月11日（日） 場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

＜実行委員長による開会宣言＞

大きくてどっしりとした看板に圧倒される。雨天時にも対応できる常設の舞台は歌って踊れる広さは十分で、音響設備も素晴らしかった。

＜太鼓の合図で子ども神輿の始まり＞

オープニングセレモニーは子ども神輿。3歳から5年生までの14～15人の子ども達が法被姿で場内を2周練り歩く。全員が共和地区以外に在住の子ども達だったが、保護者のビデオ撮影隊が取り巻き、



盛り上がっていた。

<18 時からの夜店は 9 店>

実行委員会が公募して出店を決定した。店は準備から運営まで全て個人が行うスタイルが初回から引き継がれており、的屋とは異なる独自の雰囲気を持っており、出店者のこだわりも強いようだ。今回初出店となる「輪投げ」「射的ゲーム」の出店者の思い入れは非常に強く、子ども達は何度も挑戦し、目を輝かせて景品を選んでいた。付き添いの大人も楽しんでいた。去年は農産物販売と焼きそばがあったそうだ。

・輪投げ

山北駅前の日曜朝市で共和地区の間伐の端材を利用してオブジェの販売をしていた。輪投げに活用したら楽しいのではとの提案を受け、夏祭りへの参加を決めた。輪は蔓で作られ、3 回挑戦できる。景品はお菓子なので、子どもに好評だった。営業時間が 18～19 時までと限られていたのは、店主の女性が夏祭りの司会も担当していたからである。

・射的ゲーム

南足柄市や中井町の祭りで好評だったので、共和地区でも子ども達に楽しんでもらいたいと出店。景品は全て寄付で賄っており、子どもの喜ぶおもちゃ、文房具、雑貨などがあつた。他地区でも声がかかれば出かけていくし、道具の貸し出しもするので、この活動を通して町づくりや子どもの活動に発展させていきたいと語っていた。

・焼き鳥（富山商店）

夏祭りの名物店。親子 6 人で切り盛りしている姿は壮観。仕入れは契約している御殿場の肉屋まで行き、3 日前から下ごしらえを始める。焼き鳥 600 本の串刺し等の準備は、家族の協力が無くてはできない。5 本、10 本と予約が入り、飛ぶように売れていく。これを目当てに来ている人もいそうで、味には絶対の自信があると胸を張っていた。

・綿菓子

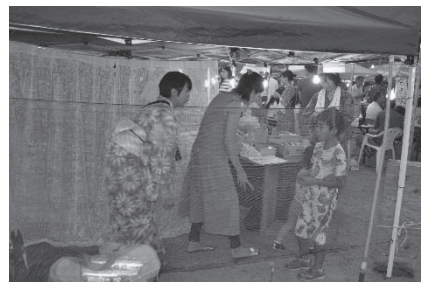
ベテランのお年寄りが担当。機械は社会福祉協議会からのレンタル。唯一無料で提供している店のため、次第に行列ができ、綿菓子づくりに追われていた。余裕があれば、子ども達に体験させたいと言っていた。

・トウモロコシ

毎年担当のおばさまグループ。山梨県から 200 本仕入れ、茹でるまでの作業を前日までにしておく。ほとんどの人が購入して、子ども達は食べ歩きを楽しんでいた。毎年評判がいいので、やりがいがあると話していた。

・天然酵母パン

共和地区に移住してきた 20 代の青年が担当。リヤカーのパン屋として山北町内で販売し、馴染みの客も増えてきている。谷ヶで他の 2 人と工場での製造も始めたようで、種類が多く、評判も良い。1 人での出店はここだけだが、客との会話を楽しんでいた。



<参加者の声>

- ・共和は母方の実家があるので、今回で3回目の参加。子どもが楽しみにしていて、親子で一緒に参加できることを大切にしたい。毎回満足している。
- ・知り合いに誘われて、今年初めて参加した。小田原から来た。子どもが楽しめる夏祭りなので、子ども神輿から参加して、とても楽しんでいる。
- ・仕事関係の方に声をかけられて、一人で参加したが、雰囲気がとても良い。
- ・農協関係でグループ参加。ステージを楽しんでいる。
- ・祖父母の家に横浜から来た。いところにも会えて、遊べるので楽しい。横浜でも模擬店が沢山出る夏祭りはあるが、ステージがあるのは共和だけ。いろいろ見ることができて良いと思う。
- ・ポテトフライの詰め放題が良かった。
- ・輪投げと射的が楽しい。

<はじめ塾（市間寮）からの参加>

- ・夏休みなので、小学生から大学生まで50人以上が参加
- ・かき氷を出店し、ステージでは「はごろも謡いと舞」を発表
- ・「ハナミズキ」によるダンスに参加した女子は、馴染みの曲で、練習しなくてもだれでも踊れるので、自然とみんなで動けたとのこと。
- ・毎年、みんな楽しみにしている。人気はトウモロコシとかき氷。
- ・合宿中の子も日帰りの子もいろいろいるが、学年を越えてみんなと過ごせる時間が良い。
- ・塾長もお子さんと参加。

<川崎市職員へのインタビュー>

平成23年、水源地利用における交流会協定の話が始まり、平成24年に協定を締結し、平成26年から川崎市民が共和地区の行事に参加するようになった。年3回開催する間伐事業では、流しそうめんやヤマメの塩焼きも振る舞われ、小学生と保護者40名がバス2台で参加しているが、近年は希望者が多く、抽選となっている。

今回インタビューを受けてくれた方は、交流事業を立ち上げた際の担当で、現在は違う部署に異動となったが、毎年夏祭りに参加しているとのこと。今でも年2～3回バーベキューを企画してもらい、個人的に共和地区を訪れる人が何人もいるようだ。発足時から変わらぬ共和地区の人たちの受け入れ態勢と熱意が、今も事業を継続できている源であると熱く語ってくれた。

<参加しての感想>

焼き鳥販売は下準備から販売まで役割分担ができていて、家族総出の名物店となっている。またステージの「タヒチアンダンス」は夫婦と友人でプロレベルの演技を披露している。家族を中心にした参加が多いことが、夏祭りが盛り上がる要因の一つではないか。

店のやり繰りは自己責任、ステージの出演料なども一切かけずに運営していることがすごいと思った。1回目からこの方針で行っているのは、実行委員会が機能し、協力体制が整っているからだと感じた。

与えられた協定事業を継続していくだけでも大変だが、もっと盛り上げようと間伐事業以外の内容を組み入れることを検討することで、相互理解が深まったのだろうと、川崎市職員にインタビューをして思った。提案者と実際に運営する支援者のエネルギーに圧倒された。担当者間の事業を通じた繋がりへの深さは行政の枠に留まらず、今でも地区行事への交流が継続されていることから感じることができる。



(3)エコの日

報告者：山北町社会教育委員 村上 健士郎

取材日：令和元年9月22日（日） 場所：福祉バス路線沿線

数年前より共和地区でも被害が出始めたヤマビル駆除対策として、バスの運行経路を中心とした沿道への薬剤散布を地域住民で行うことが行事の目的です。

集合場所の共和のもりセンターで責任者の説明・諸注意の後、全体を2グループに分け、二方向で作業に入ります。作業内容は、先に塩化カルシウムを道路に撒き、そのあと薬剤（リンゴ酸）を散布します。塩化カルシウムは容器に入れ、手袋をして直接撒き、薬剤は軽トラに乗せた大型の水槽から散布機を使い沿道に撒いていきます。



共和地区のヤマビルの被害は深刻なようで山道だけでなく、参加者の話によると畑や庭で作業などしていてもヒルに襲われることもあるし、共和のもりセンターの広場にも出没するそうです。この地区は山深い場所であるがヤマビルの被害は数年前まではほとんどなかったようです。しかし、新東名建設工事が始まり工事関係者が被害にあうようになったころから共和地区でも話題になり始めました。以前から三保地区などではヤマビルの情報があつたのですが、いつの間にか清水地区、共和地区まで下ってきたようです。動物を媒介にして下ってきたと考えられますが、はっきりとした原因はわかっていません。

共和地区、清水地区は観光資源の大野山や県立山北つぶらの公園をかかえているので、登山者・観光客にとっても大きな問題となりうるでしょう。今までは個人対応で駆除していたようですが、今年度より共和地区では年2回地域で駆除をすることになり、7月に続き今回が2回目になります。

実際に駆除に参加してみると、共和地区が大野山登山道の一部であり、上り下りが多く、道も車がすれ違えないような場所や、落石の跡や崖が迫っている個所など山岳地帯であることを改めて認識させられました。今回の作業に参加して感じたことは、地区全体から見れば一部の駆除作業ですが、それでも範囲が広く大変な労力を要するということと、今後も被害が続くようなら、地区の問題ではなく町の問題としても考えていかなければならないということです。

参加者は三十数名で、男性ばかりでなく女性の参加もありました。みなさん、和気あいあいとして日頃からコミュニケーションがよくとれている地区だなと感じました。集合場所での説明の時、ヤマビルの話ではみなさんそれぞれ経験があるようで、被害状況や薬剤の紹介など真剣に聞いていました。除草のような美化作業は別にあるということなので、新たに加わった自治会の行事ですが、みなさんがすすんで参加している様子がよくわかり、共同体としてのまとまりや意識の高さが伝わってきました。また作業とは関係ない感想になりますが、共和のもりセンターは活動場所としては適当な広さ（人が集まるスペース、



物品置場、休憩所等）を備え、広場は駐車スペースを確保でき、各行事の開催や準備には都合がよく、地区のコミュニティーとしての役割を担っていると感じさせられました。廃校舎を有効活用されている一例となるでしょう。

天気予報とは異なり晴天の中、2時間ほど山道を歩きまわり、日ごろの運動不足の解消になるような一日でした。作業の後にお弁当もいただき、ありがとうございました。

(4)さんまのタベ

報告者：山北町社会教育委員 清水 玲子

取材日：令和元年 10 月 19 日（土） 場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

サンマのタベは、15 年も続く共和の行事です。役員さんを中心に青少年健全育成会の方々が準備をしていました。また、参加している子どもたちも料理作りをしていました。共和の子どもたちの参加はありませんでしたが、地域にゆかりのある町外在住の子どもたちが参加していました。さんまのタベで、子どもたちに料理作りを体験させたいという役員さんの思いがあります。参加人数は、50 人ほどで例年より少なかったようです。いつもは、アトラクションがあるため、参加者も多くなっているようです。時間になると家族そろって集まってきました。三世代で参加している家族も見られました。また、共和地区だけでなく、町内の他地区、大井町、熱海市などからも参加していました。参加者は、お皿や箸、お椀以外にトレーやミニテーブル、敷物などを用意し車座になって食事を楽しんでいました。

・献 立

サンマの炊き込みご飯・究極の炭火焼サンマ・みそ汁・千成うり

・究極の炭火焼サンマ（今年のサンマは厚岸産）

こだわりのサンマです。焼き方は、網にオイルとレモン汁を塗ってから炭火で 40～50 分かけてじっくり焼いていました。そうすることで、サンマの皮が破れない究極のサンマが焼きあがるそうです。サンマを焼いていたのは、男の人 3 人で、サンマにつきっきりで火加減を見ながら焼いていました。毎年焼いているが、なかなか上手に焼けないと言っていました。実際に食べてみると、家でガスで焼いたものとは、全然違ってとてもおいしかったです。

サンマを焼いていた炭は、共和で焼いたものでした。共和の人以外も炭焼きをしに来られている方々がいますが、高齢化が進んでいるそうです。

・食事の配膳

テーブルにお料理が入った鍋とサンマが並べられ、各自で食べられるだけ器によそっていきます。これにも理由があります。特に子どもたちへですが、「何でもやってもらうのではなく、自分で食べられるだけ自分でよそってほしい。そして、自分のご飯は自分で作れるようになってほしい」という思いです。

・山の中でサンマ

海のない山の中の共和地区でなぜさんまのタベを行っているか？「海の恵みは山の恵みから」と言われています。豊かな海を守るためには、そこに注ぐ川が大切であり、そのためには、源流の森の環境をよくすることが不可欠です。共和でも山を大事にしています。共和の山の栄養が海を豊かにするという考えから、山の中でさんまのタベを行うようになったそうです。

小さな子どももサンマの炊き込みご飯やサンマの塩焼きをとてもおいしそうに食べている様子がとても印象的でした。魚離れが言われていますが、旬のものをおいしく食べられる、そして家族そろって食べる「さんまのタベ」は、とても意義のある行事だと思いました。



(5)ゲートボール大会

報告者：山北町社会教育委員 藤澤 秀樹

取材日：令和元年 11 月 10 日（日） 場所：共和のもりセンター（旧・共和小学校）

共和のもりセンターグラウンドで 11 月 10 日、「第 37 回共和地区親睦ゲートボール大会」が開催されました。共和地区の住民との親睦や交流などを目的に年に一度開かれているもので、1 チーム 4 人による 22 チームが参加し優勝を目指す今大会は、今年でなんと 37 回目（37 年目）を迎えました。社会教育委員は、きつねくんチーム（江上、大澤、加藤、河合）、たぬきくんチーム（武尾、村上、山崎、藤澤）の 2 チーム 8 人で参戦しました。

まずは開会式に続き、湯川町長、牧島衆議院議員を始めとする来賓の始球式で始まりしました。晴天の下、子どもからお年寄りまで、22 チームによる 4 ブロック（各ブロック 5 ～ 6 チーム）内での総当たり戦で、熱戦を繰り広げます。

一方、この大会の大きな目的は「親睦」であり、共和ルールという特別ルールが設けられており、子どもでも初心者でも楽しめる大会にうまく工夫されていることに感心しました。また、各ブロックには共和の人たちで形成されるチームが、それぞれ配置されていると聞きました。

1 試合は 20 分、本部および主審の進行で、限られた時間の中、テンポよく試合が進められていました。副審は試合に出ていないチームリーダーが務めます。大会が進むにつれて、チーム内、ブロック内、会場全体の一体感が生まれてきたように感じました。

お昼には、パンフレットにもあるように「おわんと箸をもって参加しよう」の合言葉通り、持参したお椀には JA 婦人部特製の具たくさんおいしい豚汁が配られました。

午後の試合を終え、各ブロックの優勝チームが決定した後の総合優勝決定戦は、第 1 ゲートの通過数で競いました。選手たちの渾身の一打に大きな歓声が挙がっていました。

優勝は「頼朝桜チーム」、準優勝は「新東名(A)チーム」、3 位「JA(B)チーム」、4 位は我が「たぬきくんチーム」という結果となりました。たぬきくんチームの 4 人は、総合優勝決定戦では、誰も第 1 ゲートを通させることができず 4 位となりましたが、未経験者もいる中でブロック優勝することでもでき大健闘でした。

優勝決定戦が終わるとトレーニングセンターに場所を移動し、表彰式と懇親会が開かれました。優勝から 4 位までのチームには、お米 4 キロの賞品がメンバー 4 人全員に手渡されました。その他のチームには様々な特別賞が考えられており、出場全 22 チームが表彰され盛り上がりしました。

懇親会は、今年から共に戦った各ブロックのメンバーでテーブルを囲むスタイルに変更したそうです。1 日戦い終えたブロック内のメンバーとの話も進み、親睦を深めることが出来ました。

本当に最後まで楽しめる大会でした。ありがとうございました。



10 参考資料

(1) アンケート結果

1 共和地区は住みやすいですか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
はい	0	0	3	3	1	2	1	2	2	6	10	9	7	9	6	4	1	66	54%
いいえ	0	1	1	1	0	0	2	1	0	5	3	3	6	5	3	2	0	33	27%
わからない	2	0	1	2	0	0	2	1	3	1	1	1	2	2	1	3	0	22	18%
無回答													2					2	2%
計	2	1	5	6	1	2	5	4	5	12	14	13	17	16	10	9	1	123	100%

2 前記の質問で答えた理由をおたずねします。(複数可)

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
自然が豊か	0	0	2	5	0	1	2	2	3	10	6	9	10	8	5	3	1	67	①
人が優しい	0	0	1	5	0	1	1	1	1	5	4	1	2	7	4	2	1	36	
地域の人が協力している	0	0	0	4	0	1	1	1	2	6	4	4	8	7	4	1	0	43	
交通が不便	0	1	1	2	0	0	3	1	2	8	4	6	9	6	5	5	0	53	②
福祉バスがある	0	0	1	5	0	0	1	1	1	6	5	5	7	7	3	3	1	46	
活動の拠点がある	0	0	0	3	1	0	1	0	1	2	3	2	3	6	2	2	0	26	
店がない	0	1	0	1	1	0	0	1	2	6	2	2	5	7	5	3	0	36	
鳥獣被害が多い	0	0	0	3	0	0	2	1	1	8	3	3	9	5	7	5	0	47	③
公共施設が少ない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	8	3	4	1	0	20	
人が少ない	0	0	2	2	1	1	1	0	1	3	2	2	5	4	4	4	1	33	
楽しい行事がある	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2	2	0	0	2	1	2	0	11	

3 共和地区で自慢できることはなんですか。(複数可)

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
自然が豊かなところ	2	1	4	4	0	1	3	3	4	11	10	11	11	9	7	5	1	87	①
多くの行事をおしてふれあい交流がはかれているところ	0	0	0	3	0	1	3	3	0	2	5	3	4	6	6	2	0	38	
奉仕活動への意識が高く、多くの人が参加するところ	1	0	0	2	0	1	2	2	1	6	5	4	8	7	8	2	1	50	
交通手段として共和福祉バスがあるところ	1	0	1	4	0	1	2	1	2	5	4	7	10	10	7	5	1	61	③
「お峯入り」をはじめとする歴史と文化を継承しているところ	1	1	2	3	0	0	2	3	3	7	7	5	7	11	9	4	0	65	②
結束力が強いところ	0	0	0	1	0	0	2	1	1	2	4	3	2	5	7	2	0	30	

4 地域の行事に参加しますか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
よく参加する	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	5	3	8	5	1	2	1	28	23%
参加する	1	0	0	2	1	1	3	2	2	4	4	3	6	3	3	1	0	36	30%
あまり参加しない	0	1	3	4	0	1	0	1	2	5	5	5	2	5	3	3	0	40	33%
ほとんど参加しない	1	0	2	0	0	0	2	1	0	1	0	2	1	2	3	3	0	18	15%
計	2	1	5	6	1	2	5	4	5	12	14	13	17	15	10	9	1	122	100%

5 最近(過去1～2年)参加した行事をおたずねします。(複数可)

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
夏祭り	0	1	2	4	1	2	3	2	5	6	8	8	10	8	5	1	1	67	②
サンマのタベ	0	0	1	3	1	0	1	1	2	3	4	1	1	2	0	0	1	21	
ゲートボール大会	0	0	0	2	1	0	1	1	3	5	6	6	9	7	5	1	1	48	
エコの日	0	0	0	4	1	1	2	2	3	7	11	4	11	7	4	1	1	59	③
道づくり	0	0	1	1	1	1	2	1	5	5	11	2	12	3	5	2	1	53	
防災訓練	1	1	0	3	0	1	3	1	4	7	11	8	14	11	6	6	1	78	①
環境整備	1	0	0	3	1	1	2	2	4	5	9	1	14	6	3	2	1	55	
植樹作業	1	0	0	2	1	1	0	1	2	5	6	4	8	1	2	0	1	35	
どんど焼き	1	1	1	1	0	1	1	0	2	2	10	5	11	10	3	2	1	52	
餅つき	0	0	1	1	1	0	1	0	1	1	5	2	3	4	0	0	1	21	
しめ縄づくり	0	0	0	1	1	0	1	0	1	1	4	2	4	4	0	0	1	20	
県外視察研修	0	0	0	1	0	0	1	0	0	3	5	2	12	7	4	2	0	37	

6 お峯入りの継承についておたずねします。

(1) 継承していくには何が大切ですか。(複数可)

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	
共和の誇りや郷土愛	1	1	2	4	0	0	2	3	2	7	6	6	6	8	8	1	0	57 ②
使命感	0	1	0	1	0	0	0	1	0	3	5	2	7	3	4	1	0	28
協力体制	1	1	3	3	0	1	2	3	2	8	8	7	7	7	8	4	1	66 ①
時間的余裕	0	1	0	2	1	1	2	2	2	3	2	5	2	2	3	4	0	32
親から子への伝承	1	0	1	2	0	1	0	1	2	5	7	3	7	7	4	4	0	45 ③

(2) 継承するうえで何がむずかしいですか。(複数可)

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	
共和の誇りや郷土愛	0	1	1	0	0	0	0	1	0	3	3	2	7	2	3	1	0	24
使命感	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2	3	2	5	6	3	0	0	23
協力体制	1	1	2	5	0	1	3	2	3	7	5	6	9	9	5	5	1	65 ①
時間的余裕	1	1	1	4	1	0	2	3	1	4	3	4	4	4	3	3	1	40 ③
親から子への伝承	1	0	2	2	0	0	1	2	2	6	3	5	7	9	5	5	0	50 ②

7 共和地区の今後の課題は何だと思いますか。(複数可)

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	
人口の減少が心配(限界集落になるおそれ)	2	1	4	4	0	2	3	4	2	9	11	10	14	15	7	8	0	96 ①
高齢化により支えあいが難しくなる	1	1	2	3	0	2	5	3	3	8	9	8	12	13	10	5	1	86 ②
鳥獣被害が増加する	1	0	0	3	1	1	2	2	2	8	9	9	8	10	8	9	0	73 ③
山林等が荒廃し災害が起きる心配がある	0	1	0	5	1	2	4	2	3	10	7	5	7	6	7	5	1	66
社会福祉のさらなる充実	1	0	2	0	0	0	2	1	1	5	2	3	4	7	4	3	0	35
移住者、定住者の確保	0	1	2	3	0	1	3	1	3	4	6	5	5	6	3	2	0	45
交通アクセスの整備	0	0	2	1	0	1	3	2	3	8	4	8	7	11	1	4	0	55

8 共和地区の各組織や団体、行政への要望は何ですか。※自由記述のため省略

9 【世帯主のみ】共和地区での生活についておたずねします。

(1) いつから住んでいますか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
先祖代々住んでいる	0	0	1	1	0	0	1	0	2	2	6	1	12	5	7	5	0	43	58%
終戦後に移住した	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	4	1	3	0	1	1	0	11	15%
平成以降に移住した	0	0	1	1	1	2	1	0	2	2	5	2	1	1	1	0	0	20	27%
計	0	0	2	2	1	2	3	0	4	4	15	4	16	6	9	6	0	74	100%

(2) 家族構成についておたずねします。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
子どもや孫と同居している	0	0	0	0	1	1	1	0	3	2	4	0	3	2	4	2	0	23	32%
夫婦だけで生活している	0	0	1	0	0	1	2	0	1	0	7	3	11	3	4	1	0	34	48%
ひとりで生活している	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	2	1	3	1	1	4	0	14	20%
計	0	0	1	1	1	2	3	0	4	3	13	4	17	6	9	7	0	71	100%

(3) 子どもが他地区に住んでいる方におたずねします。子どもが他地区に住んでいることについてどう思いますか。

年代	10代		20代		30代		40代		50代		60代		70代		80代以上		年代不明	合計	回答率
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性		
戻ってきてほしい	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	3	6%
今のままで良い	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	2	1	3	2	0	12	24%
子どもの考えにまかせたい	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	6	3	11	5	4	2	0	35	70%
計	0	0	0	0	0	1	0	0	2	1	9	4	15	6	7	5	0	50	100%

(2) アンケート自由記述

《男性》 回収率 78.9% (回収数 60/配付数 76)

【年代別回答者数】

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	年代不明	計
人数	2	5	1	5	5	14	17	10	1	60

【設問1】 共和地区は住みやすいですか。(「はい」「いいえ」の理由)

- ＜10代・20代＞記述無し
- ＜30代＞やりたいことをやりやすい
- ＜40代＞道路が狭い、仲間がいない
- ＜50代＞記述無し
- ＜60代＞学校がない、行事が多い
- ＜70代＞自然環境はよい。しかし人間環境は…？
- ＜80代以上＞記述無し

【設問2】 共和地区での自慢できることはなんですか。

- ＜10代・20代＞記述無し
- ＜30代＞重機や製材機などの機械や道具が揃っている、野生動物や野鳥が多い
- ＜40代＞静か（騒音がない）
- ＜50～70代＞記述無し
- ＜80代以上＞福祉バスは地域の人達の足となって、末永く走ってくれることを望む。
各々の責任において、きちんと実施されている。

【設問6】 国指定（S56）重要無形民俗文化財「お峯入り」の継承について

①お峯入りを継承していくには、何が大切ですか。

- ＜10代・20代＞記述無し
- ＜30代＞資金、定期的に続けていくこと
- ＜40代＞個々の生活を犠牲にしてまで継承する必要性を感じない、棒ふりの参加者の負担は厳しい、参加者に無記名で存続についてアンケートしたほうが良い
- ＜50代＞記述無し
- ＜60代＞人集め
- ＜70代＞保存会を中心にした地区内での演技伝承会を年に1回位開催すること。その体制づくりができていないので、早急に発足すべきではないのか。
山、水、林を豊かに。
- ＜80代以上＞体力的に出られなくなってしまった
- ＜年代不詳＞親から子への伝承だけでなく、誰にでも継承できる仕組みを考える。

②継承するうえで、何が難しいですか。

- ＜10～30代＞記述無し
- ＜40代＞人手の確保、金銭面
- ＜50代＞記述無し
- ＜60代＞人員集め（※同意見4件：少子高齢化、出演者、スタッフ）、伝承指導者の育成
- ＜70代＞地区内の人口減少と人材不足、伝承する若い人がいない、郷土愛はあるが一人で生活しているので…、今までの伝承スタイルにこだわらず地区内外から希望者を

募って組織を作り年に1～2回伝承会を行ったらどうか、生産性
＜80代以上＞後継者不足、多方面からの協力者が必要

【設問7】共和地区の今後の課題は何ですか。

＜10代・20代＞記述無し

＜30代＞住民に対する環境教育、空家の片づけへの補助、民主的な意思決定

＜40代＞記述無し

＜50代＞人口の減少や高齢化の対策ができたとしても、先住者と移住者の意識が違っていると現状は変わらない

＜60代＞記述無し

＜70代＞道路の整備、自治会要望の実践、地域組織の維持

町外に勤務する若者に、この地に住めとは言にくい。

地域住民の高齢化と人口減少で、全住民に頼る事業が多くなっている。

運転免許の返納や農地・山地の放棄という現状と、地域活動の多忙化は矛盾している（地域以外ではわからないから評価しているが…）。

移住者を受け入れる風土（精神的・物理的）が弱い。

移住者の思いや希望を尊重して支援する気持ちが薄い。

地区全体の体制づくりができていない。

＜80代以上＞既に限界集落に入っている、道路の幅員拡張と時差信号の設置

【設問8】共和地区の各組織や団体、行政への要望は何ですか。

《共和地区の各組織や団体に対して》

＜10代＞記述無し

＜20代＞人口の減少に伴い組織や団体の運営方法を変えていかないと負担が大きくなる

＜30代＞各種の組織や団体に掛け持ちで所属している人が多いので、各組織・団体で所属員を把握し、それぞれの会議や活動を同日に時間をずらして開催する等、効率的に参加しやすい環境を整理したほうが、仕事や子育てがある方には良いと思う。

共和のもりセンターの各部屋を個人に工房や店舗として安価で貸し出してほしい。

＜40代＞各団体の活動が不透明で非常に閉鎖的。LINEやSNSを利用して若年層への情報提供・報告を周知徹底できれば改善できるのではないかな。

＜50代＞記述無し

＜60代＞地域に根ざした新しい考えや人材の活用

自治会等の役員のなり手が今後心配になる。

財産区会計の詳細な公開。（監査員は地区住民以外の有資格者を）

＜70代＞組織や団体が多すぎるので統合すべきである（※同意見2件）

行事を全住民行動とするのは無理がある。公共的施策以外には有志の活動としてはほしい。

行事は地域全員の同意で行うべきではないかな。

一部の人達の考えで動いている。（若い人、新しい人達の考えや意見が活かされていない）

＜80代以上＞現在の各団体の長は頑張ってくれているが、いつまで続くか心配している。

＜年代不詳＞組織が多く、役割がわかりにくい。

《行政に対して…》

＜10～30代＞記述無し

＜40代＞つぶらの公園の活用方法を考えて、地域の活性化を行ってほしい。

<50代>記述無し

<60代>地域との活動連携を強める、いろんなところに行きたい

<70代>生活道路の整備（カーブ抜き、待避所の新設）

<80代以上>記述無し

<年代不詳>災害時の避難対策、豊かな自然や野生の動植物を保持してほしい、山林や農地の貸し借りや仲介をして持続可能な地域を維持してほしい

※上記以外に、『最近“男性”“女性”で括れない人がある。性別の記入は、その人達にとって障害になってしまう。削除の対象と考えていくべきだろう』という記述あり。

《女性》 回収率 78.8%（回収数 63/配付数 80）

【年代別回答者数】

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上	年代不明	計
人数	1	6	2	4	12	13	16	9	0	63

【設問1】共和地区は住みやすいですか。（「はい」「いいえ」の理由）

<10～30代>記述無し

<40代>年間の行事予定を早く出してほしい。いきなり植樹や環境整備と言われても、仕事があるから困る。子どもも試験や部活があるし、土曜・祝日も仕事がある。

<50代>空間が広く人との距離が程よい、野菜がおいしい、花粉が多い、土砂崩れの危険倒木の危険

<60～80代>記述無し

【設問2】共和地区での自慢できることはなんですか。

<10代>記述無し

<20代>移住者に対して、それぞれ協力やアドバイスをしてくれる。

<30代・40代>記述無し

<50代>年齢に関係なく“生きる力”を身につけた元気な方が多い。

<60～80代>記述無し

【設問6】国指定（S56）重要無形民俗文化財「お峯入り」の継承について

①お峯入りを継承していくには、何が大切ですか。

<10代>記述無し

<20代>人と人との想いや考えの共有

<30代>記述無し

<40代>きちんとした映像と音源、仕事をしている人は肉体的にも時間的にも大変

<50代>地域外のマンパワー、移住してきた人達も祭りの意味を深く知ること

<60～80代>記述無し

②継承するうえで、何が難しいですか。

<10代・20代>記述無し

<30代>演者の確保

<40代>人が不足

<50代>共和の人だけでは成り立たない、山北町全体の協力が必要

<60代>人数不足

<70代>若い人が少ない、子どもへの伝承ができない

＜８０代以上＞記述無し

【設問７】共和地区の今後の課題は何ですか。

＜１０～３０代＞記述無し

＜４０代＞高齢化により運転免許の返納が多くなると、福祉バスの時間帯や運転手の確保等々、交通手段に関すること。

＜５０代＞山で暮らしながら収入を得るしくみづくり

＜６０代＞未来を見据え舵を取る

＜７０代・８０代以上＞記述無し

【設問８】共和地区の各組織や団体、行政への要望は何ですか。

《共和地区の各組織や団体に対して》

＜１０代＞記述無し

＜２０代＞現在の組織の見直しと今後の課題を共有し、考える場がほしい

＜３０代＞記述無し

＜４０代＞年間予定を４～５月位までに出してほしい。もしくは１０月の第２日曜日とかに決めてほしい。突然言われても参加できない。

＜５０代＞福祉バスを土日祝や午後も利用したい、会社員には参加しづらい行事日程となっている、他人事ではなく自分事として考えていける力と発信力

＜６０代＞若者を呼べる地域づくり

＜７０代＞行事が多すぎる、助け合いの精神、共和が本当にモデル地区か？

＜８０代以上＞記述無し

《行政に対して》

＜１０代＞記述無し

＜２０代＞仲尾沢周辺の落石防止対策をしてほしい

＜３０代＞道路の舗装、ガソリン代の補助

＜４０代＞つぶらの公園の整備（ドローンを飛ばせる・ドッグラン・アルパカを飼育して観光牧場とし毛刈りができる）、道路幅の拡張、崖崩れ等の防止・補強、鳥獣被害への対策（鹿、イノシシ）

＜５０代＞自然災害の多さと規模が拡大している。安心・安全に暮らしていけるように。各戸が離れているし、一人暮らしの方も多いので、非常時に押すだけで発信できる警報のようなものがあると安心。

＜６０代＞道路の整備

＜７０代＞道路の整備

＜８０代以上＞記述無し

(3) 移住者用アンケート結果

【年代別回答者数】回収率 76.9% (回収数 10/配付数 13)

年代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	計
人数	2	3	2	1	2	10

【設問 1】移住のきっかけや目的は何ですか。(複数回答可)

①	自然環境（空気や水、気候、食用の野草など）	4 人
②	インターネットや雑誌の記事等で共和に興味を持った	1 人
③	知人（共和の人も含む）に紹介された	5 人
④	手ごろな物件（土地、建物）があった	5 人
⑤	共和でやりたいことがあった※具体的な回答は次のとおり 自然に近いところで生活し「生きる基盤」を作る、林業、酪農、畑仕事、農業 動物を飼う、家庭菜園、木工、染色、山歩き、森林ボランティア	8 人
⑥	その他※具体的な回答は次のとおり アウトドア趣味を行うのに立地が良い(特に山・海・川が他市町村に比べ近い)、地理 的位置がよい(横浜在住の子どもや友人と遠くない位置である)、福祉バスがある	

【設問 2】共和地区の好きなところは何ですか。

- ・共和のみにいえることはあまりないが、山北全体でいうと、農地を含む土地・空き家が多くあり、様々なことに挑戦するチャンスがある場所が気に入っています。
- ・地域の人それぞれが暮らしの知恵を持っていて、集まって何かする際に、助け合っているところ。何事にも、楽しさを持って対してくれる人が多くて明るい。
- ・やりたいことが出来る。
- ・動植物が身近にいること。製材機などが借りられること。親切な人が多いことなど。
- ・移住者を温かく迎えてくださり感謝しています。皆さん優しいです。共和だけでなく山北全体にいえることです。
- ・良い人が多い。静かで自然が豊か。
- ・人の強さ・たくましさ。野生動植物の豊かさ。
- ・森林資源を初めとして自然が豊か。
- ・人口が少ない。先住者の人柄がよく、比較的住みやすい。
- ・自治会・振興会活動に熱心で参加しやすい。地域行事が様々あり、参加できる。

【設問 3】移住者を増やすために、何が必要だと思いますか。

- ・移住希望者が移住するまでのプロセスを考え、それに対する施策。
- ・どういう人を呼びたいかを選定する。
- ・町の定住対策課の先に行くような物件の取りまとめ、窓口の設置。
- ・元から暮らしている人も移住者も、共通した、あるいは各々が思う「良いところ」を地域の宝として伝えていける場やモノを考えたい。発表する場が必要。
- ・空き家を使えるようにして貸し出す。空き家や土地（田畑、山林）と人を繋げること。これ以上環境を悪化させないこと。移住者のサポートなど。
- ・空き地・空き家。田畑・山林の貸し借りの斡旋・仲介。
- ・空き家はあっても借りられる状態でないところも多いようなので、借りられる家が必要です。
- ・山北町の魅力を発信する。インターネットなどで。
- ・仕事があること。
- ・仕事。空き家として提供できる住宅。
- ・生活の利便性を高める。山北町の店舗、交通機関の整備・充実。

- ・周辺市町より子育て環境を高める。
- ・空き家・空き地などを発掘・提供と住環境整備、道路の整備・維持継続。
- ・地域の魅力を様々な方法で広くアピールし、共感者の定住を促進。

【設問４】移住して、困ったことや悩んだことはありましたか。

- ・外でお酒を飲んで、共和までの帰りが大変。
- ・地域の、将来の担い手世代が少ない。消防団など大変。
- ・地域の行事などで、どのように関わればよいか、悩むことがありました。少しずつ教えていただき解決しましたが。
- ・ありました。
- ・自治会・地域振興会・NPOなど色々な組織がありわかりにくかった。
- ・今のところありません。
- ・色々教えていただいたので、困ったことはないです。
- ・福祉バスが動いてない時間の移動手段。
- ・昔から住んでいる人から差別意識を感じることもある。
- ・救急病院が遠い、少ない。
- ・冬季の積雪、道路凍結による交通マヒ。予定を変更せざるを得なくなる。
- ・道路周辺の切り立ち、落石倒木が心配。
- ・畑がシカ・イノシシなどの被害にあった。ヒル・ダニ・ムカデ被害を受けた。

(４)移住に関わった方用アンケート結果

★○数字は、同じ人の意見であることを表す。回答者は 7 人なので①～⑦まで。無回答者は欠番とした。回答者の年代は 60 代～80 代である。

【設問１】移住してもらうために、どんな働きかけ、条件整備をしましたか。

①山地酪農に関わって（連合自治会長として）

討議資料を作成し、全戸配付した。営農説明会を開催し、住民の質問や意見を聞いた。自治会の総会で、移住者に挨拶してもらった。

移住者用のシェアハウスの取得について（連合自治会長として）

臨時総会を開催し、自治会員の総意で決定した。そこでの意見を踏まえ、「使用規定」を作成。翌年の定期総会の議案として提案。承認される。（シェアハウス使用者の条件として、自治会への加入、共和地域の振興に寄与するなどを入れた。）

②広報「共和のもりセンター」を 2018 年 5 月に発刊し（奇数月発行）、移住者の活動記事を連載している。広報による移住者と地域の親密性の向上、地域住民の移住者活動理解と支援促進、移住者の地域行事などへの幅広い理解を図った。

移住者の地域施設（もりセンターなど）の活用促進、日常活動協力・支援など。

③交流する事業の提案や情報発信

④住める空き家・空き地を探す。地区内の組織で、受け入れ体制作りを提案してきている。

個人的には、自分の畑で作ったものを差し入れている。

移住後、話し合いをして、困っていること、改善したいことを聞いている。

⑤関係人口を作ること。

⑥よく話を聞く。暮らせる施設の確保。住み始めたあとの面倒も見る。町の助成金申請などの情報を伝える。

⑦山北町にはたくさんの山があり、山林所有者も大勢いる。しかし、山がお金を生んでいない。山がお金を生む姿にすれば、山北町は豊かな町に成れると考え、シイタケ原木の生産・産地化を進めている。同時に、災害に強い山作り、動物の住める山作りも目指す。

【設問２】共和地区の良いところは何だと思いますか。

- ②自然が豊か、大野山がある。住民の人柄がよい。移住者は比較的住みやすい。地域は移住者を受け入れる。地域行事、地域活性化に熱心である。地域生活を守り、利便性確保・向上に心がけている。地域行事が様々あり、参加できる。
- ③自助・共助・公助の考えで、地域振興を推進していくこと。
- ④自然環境が多い。空気、水、太陽、森など。掘り起こせる「宝物」が眠っていること。コミュニティバスが運行されていること。
- ⑤自然
- ⑥自分たちの地域は自分たちで守る、共に協力する意識があること。
- ⑦人情、助け合い

【設問３】移住者を増やすために、何が必要だと思いますか。

- ①今までは、役員等の個人的対応が多かったと思うが、今まで以上に組織的対応が必要と思われる。現在、移住者の一人が町の定住対策課の「移住者交流会」の企画などに関わっている。
- ②道路整備、交通機関の確保。住居の確保、賃貸改築支援。森林資源の活用、地域の強みを生かした地域雇用の創出。地域活動の担い手育成。地域自治、振興活動の維持と革新。地域と山北町、その他自治体や企業との連携強化。プロジェクトによる各種事業の推進。
- ③様々な事業やイベントで情報発信をする。
- ④生活基盤（特に、経済的な）を作ること。人間関係の狭さを改善すること。移住者と話し合っ、困っていること、改善したいことを聞ける組織作りをすること。
- ⑤空き家対策
- ⑥地域は他町からの移住者を「よそ者」扱いでなく、受け入れる気持ちが大切。移住者の良いところを引き出す。
- ⑦人が住む集落の裏山の杉林、ヒノキ林を災害に強い広葉樹林（クヌギ、コナラ林）に変え、15年周期でシイタケ原木の生産を行い、お金になる山作りの楽しさを知っていただく。そのため、山林の貸し出しも提案する。

【設問４】移住者に期待することはどんなことがありますか。

- ①若者の発想で、私たち高齢者には思いも寄らない共和の魅力を引き出し、広めていってほしい。文教大の学生が言った「共和には宝がある」がヒントになる。
- ②地域自治・地域振興活動の理解協力。住民高齢化への対応、支援。森林の保全と利活用への参画。
- ③体験を口コミでPRして輪を広げていってほしい。
- ④新鮮な眼で共和地区全体（人間関係、地域環境）を見渡し、新しい発見・気付いたことを発信してほしい。（勿論、それを受け入れる人間関係が作られることが前提だが）その為に、全地区住民が参加する集まりを定期的を開催すること。
- ⑤地域の人に溶け込むこと。
- ⑥共に協力し、共に地域づくりに参加することを願う。
- ⑦「山を観るには、一度山から降りてみろ」と言われる。山に生まれ、山に住んでいると、自分が何をしようとしているのか、判らなくなることがある。別の角度からの意見が必要と思う。

社会教育委員だより

No.21

令和元年 9 月 1 日
山北町社会教育委員会議

令和元年度の「社会教育委員会議」がスタートしました。昨年までの委員が大幅に入れ代わり、ほぼ新しいメンバーで社会教育のあり方について検討することになりました。

今年度も、「社会教育委員会議」として考えていることや取り組んでいること等を地域住民の方々にお知らせし、共に考えていただきたいと思います。

山北町教育委員会から「諮問」を受けました。

諮問内容

少子高齢化時代における
社会教育のあり方



4/23 教育長より社会教育
委員会議議長へ

今、山北町は少子高齢化が一段と進んでいます。

令和元年 5 月 1 日現在で就学している小学生は、川村小学校が 369 名、三保小学校が 8 名と、合わせても 377 名にすぎません。山北中学校の全校生徒は 214 名です。それぞれが減少傾向にあります。

一方で、町の人口に占める 65 歳以上の高齢化率は 39.2% となり、今後は更に高い割合となっていくものと予想されます。

このような地域の現状から、町としても定住促進や移住対策等に重点を置いて取り組みを進めていますが、決定打と言えるような方策を見極めるのが難しい状況にあります。

地域社会においては、山北町の問題だけではありませんが、経済格差や子どもの貧困の問題、過疎化や交通手段の確保の問題、地域共同体意識の希薄化等々の課題が山積しており、これからの地域社会のあり方を考えるうえで大きな壁になっています。

令和元年度・山北町社会教育委員

河合剛英【議長】、山崎幸與【副議長】
佐藤博美【副議長】、清水玲子、瀧澤康子、
大澤洋行、村上健士郎、関優子、諸星カツ、
藤澤秀樹、武尾典幸、岩井隆豪

社会教育委員会議としても、上記のような少子高齢化や人口減少等々の厳しい現状を踏まえつつ、諮問された課題について、住民のみなさま方の声もお聞きしながら、社会教育のあるべき姿を探求していきたいと考えています。

少子高齢化時代における社会教育のあり方を考える

－共和地区の取り組みをととしての考察－

山北町の6地区の中で、「共和地区」は最も小さな地区です。令和元年5月31日現在で世帯数が92、人口は184名（男性94・女性90）です。

明治22年（1889）に、旧皆瀬川村と旧都夫良野村が合併して「共和村」となり、昭和30年（1955）に山北町と合併しました。その時の共和村の人口は117世帯、703名でした。山北町と合併してからの約60年間で、世帯数の減少はそれほどではないものの、人口は大幅に減少しています。また、町内では共和地区のみが、15～64歳の生産年齢人口よりも65歳以上の老年人口の方が多いという状況ともなっています。

社会教育委員会議が、今回の研究の対象として「共和地区」を採りあげたのは、上記のような急激な人口の減少、高齢化世帯の増加という社会現象の他に、各集落が山間部に点在しているという不便さや共和小学校の閉校という地域の精神的な支えを失うという状況にありながら、連合自治会・福祉協議会・青少年健全育成会・地域振興会等の組織が、長年にわたって「地域の活性化」や「縦横のつながり」、「生活の不自由さの克服」「伝統的文化の継承」等をめざして、不断的な努力を積み重ねてきたという実績があるからです。



共和のもりセンター

旧共和小学校（平成23年3月閉校）の校舎を改築した共和地区の中心地。標高334メートル！

お峯入り

国指定重要無形民俗文化財
山北町共和地区に伝わる民俗芸能。
「お峯入り」とは山中で修業を行うことを意味し、修験道の儀礼が芸能化したものと考えられています。



共和地区のこれまでの取り組みは、これからの地域社会のあり方を考える上で、大いに参考になるものと考えています。共和地区の皆様方には社会教育委員が各種行事を取材させていただく等でお世話になりますが、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。



社会教育委員だより No.22

新年あけまして おめでとうございます。

令和2年1月1日

山北町社会教育委員会議

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

「少子高齢化時代」と共に国民の平均寿命も伸び、「人生 100 年時代」とまで言われるような時代を迎えています。経済状況や人々の働き方も大きく変わり、かつてのように悠々自適な「老後を楽しむ」という状況ではなくなってきました。長い人生をどのように生きていくかは、私たち一人ひとりにとって大きな課題ともなっています。

私たち社会教育委員は、今年度「共和地区の取り組みをとおして少子高齢化時代における社会教育のあり方を考える」をテーマに共和地区の各種行事を取材させていただきました。そこでは、共和地区の人たちの様々な工夫や努力を感じることができました。今号からそれらの取材結果を紹介します。

地域の良さの継承

▼ 誰もが楽しめるような工夫をする ～お参りだけではない



第 37 回ゲートボール大会 11 月 10 日（日）

共和地区の皆さんが親睦や交流を目的に年に一回開かれている。今回は、1 チーム 4 人、計 22 チームが参加した。町長、国会議員をはじめとする来賓の始球式で始まった。37 回も続いているわけは？

- ① 共和特別ルールの採用…苦手な人や子どもへ優しい！
…第一打が第 1 ゲートを通過しない時、ふつうは同じ位置からやり直しますが、2 打目以降を 1m ずつ前に出て打つ。
- ② 懇親会を企画…参加者が語らいコミュニケーションが深まる
…最初に優勝チームにトロフィー、全参加チームに参加賞！
- ③ より良いものをめざして…次年に向けた反省会



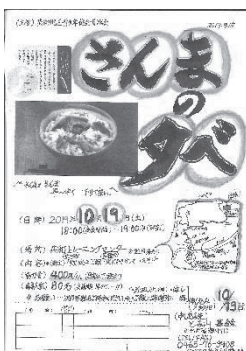
第 9 回夏祭り 8 月 11 日（日）

参加人数は 300 人以上。共和から外に出た人たちだけでなく、他市町からもこの日を楽しみに共和のもりセンターに集う。子ども神輿、13 の夜店、ステージでは様々な舞踊や演技が披露され、エネルギッシュな企画が参加者を大いに楽しませしてくれる。



地域の活性化

▼新しい企画や地域の魅力が仲間を呼び込んだり、他地域からの移住を促進したいする。



さんまの夕べ 10月19日(土)

海のない山の中の共和地区でなぜ「さんまの夕べ」なのでしょう。

- ① 「海の恵みは山の恵みから」
…共和の山の栄養が海を豊かにするという考えから山の中でさんまの夕べを行っている。
- ② 子どもたちがさんま料理作りの体験をし参加者は50人を数える。
- ③ 多くの皆さんに参加してもらうためポスターを作っている。

放送局 テレビ朝日
日時 11月30日
番組名 ごはんジャパン



テレビ番

00字 人生の楽園 山形の里
心も耕すりんご農家宿
30字 ごはんJ 神奈川牛乳
56字 池上彰そうだったのか
世界地図を見てわかる

魅力ある共和に移住した若者の紹介

※山北町あんしんメール 11月29日より



テレビで放映

山北町で、若くして山地酪農を志し、一人で奮闘する女性酪農家へのエールを込めて、牧場で採れた濃厚なミルクと地元の野菜をふんだんに使い、洋食の匠が腕をふるう！果たしてその味わいとは！？

地域のつながり

▼個人でできないことは、地域で団結して克服する。

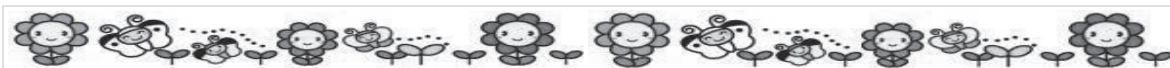


共和エコの日 9月22日(土)

数年前から共和地区でも被害が出始めたヤマビル駆除対策。個人で駆除するのではなく、薬剤散布を地域住民全体で行うことで効果をねらっている。バスの運行経路を中心とした沿道等へ塩カルとリンゴ酸を年2回散布している。

全国社教連会報より「学校支援から地域との協働へ…社会教育に期待されること

地域格差が拡大し、課題が多様化し、個々の家族や個人が抱える課題とその背景も複雑化している現在、…(中略)…地域における多様な活動が子どもたちや家族との絆づくりの場になることが期待されています。また活動に関わることは担当した人々の成長を促すという面もあります。従来の学校教育、家庭教育では行き届かなかった部分を支援する協働活動が地域づくりの核ともなりうるのです。社会教育に期待されることは益々拡大しているといえます。(社教連会報No.85)



社会教育委員だより

No.23

令和2年3月16日

山北町社会教育委員会議

この1年間、私たち社会教育委員会では、「人口の減少」や「過疎化」、そして「少子高齢化」という地域社会にとって難題とも言える現状を踏まえつつ、「少子高齢化時代における社会教育のあり方」を模索してきました。「学校教育以外の教育は社会教育である」という幅広い活動内容と、人々が生涯にわたって学び続ける環境や体制づくりを考えると、どのような指針を提示すればよいのかは、かなり難しい課題でもありました。このような中で、一つのヒントとなったのが共和地区の取り組みです。共和地区の高齢化率は52.81%になっています。他地区と比較すると、かなり高い割合になっています（右表参照）。

しかし、高齢化社会であり山間部に点在する集落であるからこそ、地域の人たちが協力し、不自由さを克服している事例があります。

【山北町の高齢化率】

※R2.2.1現在 福祉課調べ

山北町全体	39.51%
山北 地区	40.53%
岸 地区	38.05%
向原 地区	38.17%
三保 地区	42.89%
清水 地区	43.85%
共和 地区	52.81%

福祉バスへの挑戦



※1号車の運行…6:32～19:42、2号車の運行…7:15～12:00

▼個人でできないことは地域で団結して克服する。自助・共助・公助の精神！

自治会役員の方の声

共和は「自然が豊か」ですが、厳しく不便なことが多いです。だから、知恵を出し、改善の工夫をします。そのためには地域の協力体制が必要です。町がやってくれることをただ待つのではなく、地域でできることはまず地域でやらなければいけません。それでもダメな時は町にお願いします。自助・共助・公助の精神です。そこで生み出されたのが「共和福祉バス」です。

福祉バスはどんなことに役立っていますか。

福祉バスは、1号車と2号車（軽）があり、高齢者の方の買い物、病院通いや学生の通学に利用するなど、なくてはならない地域の交通機関になっています。



福祉バスのことを詳しく教えてください。



福祉バスは、月曜日から、金曜日まで平日だけ利用できます。現在、午前 3 便、午後 4 便の定期的に動いている「定期便」と電話で予約ができる「予約便」があります。2 号車（軽）は、「ドアツードア」の申し込みがあると、午前中に玄関前にも来てくれます。特に歩行が難しい方に役立っています。2018 年度は合計で 5,677 人が利用しました。

平成 23 年に共和地区福祉バスとして運行を始めましたが、それまで長い時間がかかりました。本格運行が始まった時は本当に嬉しかったです。



福祉バスの主な歴史

2004 年（平成 16 年）深沢地区で先行実施	2008 年（平成 20 年）福祉バス安全祈願式 ・住民に披露 ・共和地区福祉バス試運転 ・福祉バス待合所（2 カ所）完成祝い式典
2005 年（平成 17 年）地域住民集会	
2006 年（平成 18 年）共和巡回バス委員会 ・近隣タクシー会社に見積もり依頼 ・役場が巡回バス支援体制へ	
2007 年（平成 19 年）5 人乗りバス 1 回目試行 ・レンタカー 10 人乗り 2 回目試行 ・住民アンケート、81%バス導入を！ ・地域全体会議、運行計画と意見交換	2011 年（平成 23 年） ・試行 3 回目 共和小学校閉校 ・ <u>共和地区福祉バス本格運行実施</u>



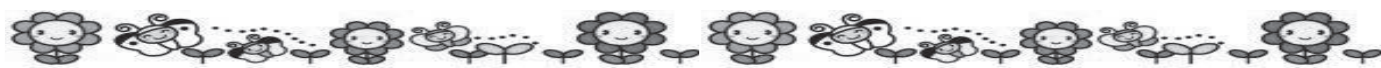
これから映画会楽しみだわ！

地域の方が、「小地域サロン」に参加するために、会場の共和のもりセンターに福祉バスを利用してやってきた時の写真です。「小地域サロン」とは、共和地区住民福祉協議会が主催するお茶飲み会で、地域の人々の昔話やゲームなどを行います。今回は、初めての映画鑑賞会でしたが、とても好評だったそうです。

共和福祉バスは、共和地区住民が会費を負担し、会員となって設立されました。利用者の声や運行上の問題を協議する事務局会議が毎月あり、町企画政策課長も参画する運営会が年 3 回あります。地域の人たちは、より良く生きるための方策をいつも模索しています。

取材を通じて、過疎化や少子高齢化に立ち向かっていくために、強力なリーダーと支える人たち、そして協力する地域住民という三位一体の関係があることの重要性を改めて感じることができました。





社会教育委員だより No.24

令和2年9月1日 山北町社会教育委員会議

昨年度から、山北町社会教育委員会議では【少子高齢化時代における社会教育のあり方を考える ～共和地区の取組みをとおしての考察～】をテーマに、共和地区の各種行事や取組みを取材し、地域の課題や今後の展望等についても、各組織の代表の方々からお話を伺いました。

共和地区に限らず、過疎化や高齢化への対応は難題であり、一地域の工夫や努力で解決できるような容易な課題ではありません。しかしながら、「時の流れるままに手をこまねく状態が続いて良いのでしょうか」と言うのが新たな問いかけになってくると思います。



共和地区はこの30年程の間に人口が半減し、高齢化率も町内で一番高くなっています。人口減少や高齢化は里山の荒廃や耕作放棄に繋がり、鳥獣被害や山林等での自然災害の増加の要因にも成り兼ねません。ただ、取材を通して大きな課題を抱えながらも、様々な工夫や努力を重ねながら、人々が生活している実態も浮かび上がってきました。

私たちはこのような実情を踏まえ、今年4月末に共和地区の中学生以上の全住民を対象としたアンケート調査を実施しました。調査項目には、選択肢のほかに自由記述欄も設けて意見を求めました。また、共和地区では自然環境を活かした多様な取組みをする中で移住者も増えていることから、移住者や移住に関わった方々へのアンケート調査も実施しました。

共和地区の皆さま方には、昨年度の各種行事への私たちの社会教育委員の参加をはじめ、今回のアンケート調査を含め、ご理解ご協力をいただき誠にありがとうございました。

考察結果につきましては、来年2月に山北町立生涯学習センターで開催予定の神奈川県社会教育委員連絡協議会地区研究会で発表し、皆さまには紙面で報告をさせていただく予定です。



今年度も社会教育委員会議の取組みにご理解ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

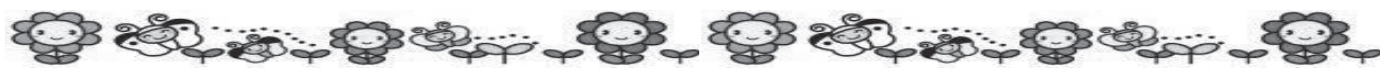
議長：河合剛英 副議長：山崎幸與、佐藤博美

委員：清水玲子、瀧澤康子、大澤洋行、村上健士郎、武尾典幸、関 優子、岩井隆豪

【新任】金子妙子（山北町文化団体連絡協議会）

【新任】高橋栄治（山北町PTA連絡会）

※選出組織の役員改選に伴い、本年度上記2名の方が委員に新任されました。



社会教育委員だより No.25

令和3年1月1日 山北町社会教育委員会議



あけましておめでとうございます

よき新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。



昨年も山北町社会教育委員会議の活動にご理解ご支援をいただき、心より感謝申し上げます。特に共和地区の皆さまには、調査研究に伴うアンケート調査にご協力をいただきまして誠にありがとうございました。

昨年の春先から新型コロナウイルスの感染が拡大し、山北町でも社会教育（生涯学習）に関わる多くの行事が中止、あるいは「3密」を防ぐために活動の規模を縮小しての開催という事態が続いています。いつ感染が収束するのか見通しが立たないという不安感がありますが、今年も十分な予防対策を講じながら、諸活動を進めていく必要があります。

こういった状況の中、私たち社会教育委員会議では毎月会議を開催し、令和元年度から約2年間をかけて【少子高齢化時代における社会教育のあり方を考える ～共和地区の取り組みをとおしての考察～】という研究課題に取り組んできました。

社会教育委員が共和地区の各行事に参加したり、地区住民へのアンケート調査を実施したりすることにより、地域の実態や課題等が鮮明となり、現状や将来に対する住民の意識を把握することができました。社会教育委員会議ではこれらの結果をまとめ、神奈川県社会教育委員連絡協議会地区研究会での県内市町村への発表と、3月末の山北町教育委員会への答申に向けて取り組んでいます。

私たちが取り組んでいる【少子高齢化時代における社会教育のあり方を考える】という課題は昭和の終盤から平成、そして令和の時代にまで続く大きな社会状況の変化の中で、全国のどこの地域社会も抱える今日的な問題ではあるものの、一地方の取り組みでは解決への筋道がなかなか見通せないという大きな難題でもあります。

また、地域の活性化や住民の融合等を目指して、先駆的に活動が続けている共和地区をとりあげましたが、これを他地区にまで広げ、普遍化していくには、様々な条件整備や体制の強化、核となる指導者の育成や行政のバックアップ等々、課題が多いこともわかってきました。

今、私たちの社会は全国的な規模で少子化・高齢化・過疎化が進んでいます。それだけをとっていても社会教育（生涯学習）を推進する上で大きな壁となりつつあります。またマスコミでもとりあげられているように、格差の拡大やひきこもりの増加、児童虐待や人権を無視するようなヘイト問題の増加等々、人と人との繋がりを細くさせるような事象や事件が増えているのも心配です。「共に生きる」「共に育てる」「共に活動する」「共に喜び合う」「共に支え合う」といった、ごく自然な人間関係や社会環境を再構築することが社会教育（生涯学習）を進めるために必要なのではないかと考えています。

山北町社会教育委員名簿

任期（平成31年4月1日～令和3年3月31日）

役 職	氏 名	選 出	任期歴
議 長	かわい 剛 英	岸	5 期
副議長	やまざき 幸 與	共 和	1 期
副議長	さと 藤 博 美	三 保	2 期
委 員	しみず 玲 子	山 北	1 期
委 員	とりうみ 昌 俊	山 北	平成31年4月1日～ 令和元年8月
委 員	たき ざわ 康 子	岸	2 期
委 員	おおさわ 洋 行	向 原	1 期
委 員	むらかみ 健 士 郎	向 原	1 期
委 員	たけ お 典 幸	清 水	1 期
委 員	もろほし 星 カ ツ	文化団体 連絡協議会	平成31年4月1日～ 令和元年11月
委 員	かね こ 妙 子	文化団体 連絡協議会	令和2年5月27日～
委 員	ふじさわ 秀 樹	P T A 連絡会	平成31年4月1日～ 令和2年3月
委 員	たかはし 栄 治	P T A 連絡会	令和2年5月27日～
委 員	せき 優 子	婦人会 連絡協議会	1 期
委 員	いわい 隆 豪	校 長 園長会	1 期

事務局	まつだ 浩 義	山北町教育委員会生涯学習課 課長
	かとう 陽 一 郎	同 社会教育指導員【平成31(令和元)年度担当】
	かとう 拓 也	同 副主幹【令和2年度担当】

令和2年度神奈川県社会教育委員連絡協議会地区研究会【山北町会場】

発 行 山北町社会教育委員会議

発行日 令和3年3月

事務局 山北町教育委員会生涯学習課

〒258-0195

神奈川県足柄上郡山北町山北1301-4

Tel 0465-75-3649